

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯と経過

轟貝塚は縄文早期末から前期の轟式土器の標識遺跡であり、古くから研究者の間で注目されてきた貝塚である。すでに1935（昭和10）年には小林久雄氏の論考で「轟式土器」の名称が用いられており（小林1935）、本貝塚より出土する、貝殻条痕を地文として隆起線文などを特徴とする縄文土器は、戦前から知られた土器型式であった。1958（昭和33）年3月14日には、保護されるべき遺跡として市史跡に指定された。

これまで行われた調査を列記すれば、1917（大正6）年の濱田耕作氏や鈴木文太郎氏、山崎春雄氏らによる京都帝大や熊本医専による調査（第1次調査）、1919（大正8）年の濱田耕作氏、清野謙次氏ら京都帝大の調査（第2次調査）、その翌年に東北帝大の長谷部言人氏による調査（第3次調査）が行われた。続いて1930（昭和5）年に鳥居龍蔵氏、小林久雄氏による調査（第4次調査）、戦後には1958（昭和33）年の小林久雄氏、松本雅明氏、富樫卯三郎氏を主体とした宇土高校や熊本大学などによる調査（第5次調査）、1966（昭和41）年の慶應義塾大学（以下、慶応大学）の江坂輝彌氏を主査とする熊日学術調査団による調査（第6次調査）が実施された。第5次調査は松本・富樫1961、第6次調査は江坂1971で概要報告されている。

近年では、宇土市教育委員会による宇土市内遺跡範囲確認調査事業（国庫補助事業）の一環として、平成16・17年度に轟貝塚の範囲確認調査（第7・8次調査）を実施した。その成果から貝層の一次堆積及び二次堆積の想定範囲を示した。

以上、第1～8次調査の調査概要については、第3章で論述することにした。

その他、市立鶴城中学校建設計画や用水路工事に伴い、轟貝塚の約100m東側に隣接する西岡台貝塚の発掘調査が行われた。用水路工事に伴う1983・1984（昭和58・59）年実施の発掘調査の結果、貝層は2つに大別され、下層が轟・曾畑式土器などの前期の土器を主体とし、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とすることが明らかになるとともに、ドングリなどの堅果類の貯蔵穴が5基検出された。

これらの発掘調査の成果や轟式土器については、多数の関連論文や報告書などが刊行されている（付論2参照）。これらの調査によって縄文時代から中世にかけての土器・陶磁器、貝製品、石器、漁具、骨角器など多種多様な遺物が出土し、九州における縄文文化の実態解明に関して大きな成果が得られている。

ところで、轟貝塚から東へ約4kmには曾畑式土器の標識遺跡である曾畑貝塚（宇土市岩古曾町）が位置する。古くから知られていた貝塚であり、1958（昭和33）年に江坂氏を中心とする発掘調査が実施され、多くの遺物が出土した。調査後、本出土品は慶応大学で保管され、轟貝塚第6次調査の出土品とあわせて「慶応大学資料」と呼ばれてきたが、2001（平成13）年に調査図面・日誌などの複写物とともに宇土市へ移管された。

移管後まもなく、宇土市及び宇土市教育委員会による「曾畑・轟貝塚出土遺物里帰り展」が宇土市立図書館郷土資料室で開催され、数多くの来館者が訪れた。これらの資料については、ごく一部を除き未報告であったが、展示会後、接合や実測図作成などの整理作業を実施した。

さて、轟貝塚第6次調査の契機は、熊本日日新聞社が中心となって組織した熊日学術調査団が宇土、不知火地方の古跡学術調査の一環として行ったもので、当時、日本考古学協会委員で慶応大学講師だった江坂輝彌氏を主査とし、1966（昭和41）年3月20日から同29日の期間で実施した。本書はこの内容についてまとめた再整理報告書である。その他、付編において轟貝塚や轟式土器に関連する主要な論考を再録するとともに、文献一覧を作成した。

第2節 調査の組織（敬称略、役職は当時）

－発掘調査－（昭和41年3月）

熊日学術調査団（団長伊豆熊日社長）による宇土市宮ノ庄「轟貝塚」の発掘調査が二十日から始まった。第一日はクワ入れ式のあと年代ごとに異なる各期の貝層の状況を調べた。沖縄や鹿児島県の研究者も新しく加わり、多彩な顔ぶれで発掘が進められている。

調査には十八日来熊した主査の江坂輝彌氏、金ソウル大学教授のほか高宮沖繩大学助教授、河口鹿児島大学講師、池水出水高校教諭、鈴木宮崎短大講師、小片新潟大学助手、地元から富樫宇土高校教諭、伊藤熊本大学助手の各調査員、また慶応大学、国学院大学、別府大学、京都学芸大学、宇土高校の学生生徒ら約五十人が参加した。

この日午前十時から現場でクワ入れ式のあとトレンチ（Aトレンチ＝長さ六十メートル、幅二メートル、B・Cトレンチ＝長さ三十メートル、幅二メートル）を三本掘り、貝塚のたい積状況を調べた。同貝塚は縄文式時代の早期、前期、中期、後期、晩期の貝層から成っており、たい積層の異なるものを層的に発掘することがもつとも効果的とみられるので、各期ごとに貝層の状況調査を行なったもの。

この日の調査ではAトレンチからイヌの骨が出たほか土器、石器、骨格も出始めた。同貝塚か

「轟貝塚」発掘始まる

多彩な顔で貝層調査

出土する土器は轟式土器と呼ばれ、西九州を中心に北は韓国、釜山付近、南は奄美大島、徳之島にいたる地区に分布しているが、韓国や沖縄、鹿児島県の考古学者も調査に参加している。調査はあてられることになろう。調査は二十九日まで十日間つづけられ

第1図 轟貝塚の発掘調査を伝える新聞報道
昭和41年（1966）3月21日付 熊本日日新聞



江坂輝彌氏による轟貝塚現地指導（2001年2月）

轟貝塚出土遺物保管状況（慶応大学、2000年6月）



曾畑・轟貝塚出土遺物里帰り展（2001年11月）



渡辺誠氏による調査指導（2004年3月）

- | | |
|-------|--|
| 調査団長 | 伊豆富人（熊本日日新聞社社長） |
| 副 団 長 | 島田四郎（熊本日日新聞社専務） |
| 主 査 | 江坂輝彌（慶応大学文学部専任講師） |
| 副 査 | 松本雅明（熊本大学教授）、乙益重隆（熊本女子大学教授）、賀川光夫（別府大学教授） |
| 客 員 | 坂本経亮（肥後考古学会会長） |
| 調 査 員 | 麻生優（國學院大学講師）、池水寛治（鹿児島県立出水高校教諭）、伊藤圭二（熊本大学助手）、小片保（新潟大学教授）、小片丘彦（新潟大学助手）、金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）、河口貞徳（鹿児島大学講師）、隈昭志（熊本県立山鹿高校教諭）、鈴木重治（別府大学講師）、杉村彰一（山鹿高校教諭）、富樫卯三郎（熊本県立宇土高校教諭）、渡辺直経（東京大学助教授）、渡辺誠（慶応大学） |

作業員 慶応大学・國學院大学・別府大学・京都学芸大学・宇土高校学生

特別参加 高宮広衛（沖縄大学助教授）、金元龍（ソウル大学教授）

－整理作業、報告書作成－（整理作業：平成13～15、18年度、報告書作成：19年度）

責任者 坂本光隆（宇土市教育長、13～15年度）、根本忠昭（同、18・19年度）、木下博信（同、19年度）

総括 吉永栄治（宇土市教育委員会文化振興課長、13年度）、高木恭二（同、14・15、18・19年度）、

事務局 高木恭二（文化振興課長補佐、13年度）、山本和彦（文化振興課文化財係長、14・15年度）、船田貞明（文化振興課長補佐、18年度）、松下敏親（同、19年度）、松田安代（文化財係参事、13～15年度）、一安隆正（文化財係主事、13・14年度）、下田志穂里（文化財係参事、15年度）、宮田尚子（同、18年度）、春木咲子（同、18・19年度）、村上淳子（文化財係主事、18・19年度）、村田嘉奈子（文化財係参事、19年度）

執筆・編集 藤本貴仁（宇土市教育委員会文化振興課参事）

整理作業員 境美和、林和美、春川香子、平木君代、山口陽子

協力機関及び調査指導・協力者

慶応大学、三重中京大学、新潟医学会、日本考古学会、肥後考古学会、平凡社、江坂輝彌（慶応大学名誉教授）、渡辺誠（名古屋大学名誉教授）、近森正・阿部祥人（慶応大学文学部）、菊池泰二（九州大学名誉教授）、宮本一夫（九州大学文学部）、甲元眞之（熊本大学文学部）、中村五郎（福島県文化財保護審議会）、水ノ江和同（文化庁記念物課）、岡村道雄・松井章・丸山真史（奈良文化財研究所）、島津義昭・西住欣一郎・帆足俊文・池田朋生（熊本県教育委員会）、吉田恒・濱口俊夫・根本なつめ・佐藤伸二・辻誠也（宇土市文化財保護審議会）、木下洋介（宇土市史編纂室）、淵上真行（宇土市役所）、倉元慎平（熊本大学文学部学生）

引用・参考文献

小林久雄 1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第1巻第2号 東京考古学会

松本雅明・富樫卯三郎 1961「甕式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第47巻第3号
日本考古学会

江坂輝彌 1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号 日本考古学協会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

(1) 遺跡の位置

熊本県宇土市は、熊本県の中央沿岸部から西側に突出した宇土半島北側から同基部に位置し、東西24.8km、南北約7.6km、面積は約74.19km²で、東西に細長い地形をしている（第2図）。宇土半島は北側に有明海、南側に不知火海（八代海）と面し、先端部に天草諸島が連なっており、熊本平野と八代平野、有明海と不知火海を隔てる境界となっている。

宇土市の北側には熊本県三大河川の一つである緑川が東西に貫流しており、その南側には緑川の支流である浜戸川（旧緑川）が東西に流れている。流域周辺は両河川によって形成された沖積平野が広がっており、北に熊本平野、南に八代平野をのぞみ、古代から現在にいたるまで交通の要衝である。

轟貝塚は行政区画としては宇土市宮庄町字須崎・居屋敷・池田に所在する。かつて宮庄町周辺は住居が点在し、周辺に田畑が広がる典型的な農村集落であったが、宇土市街地から南西へ約2kmと比較的近距離に位置する立地条件から、現在、古くから存在する集落を核として周辺に新興住宅地が広がっており、宅地造成に伴い地区人口は年々増加傾向にある。このような人口の伸びは、市街地近郊のほぼ全ての地区においてみられる。

(2) 地理的特色

宇土半島は内帯と外帯を分ける白杵―八代構造線（中央構造線）と、大分―熊本構造線に挟まれた地域に属しており、宇土半島基部から突端にかけて白亜系、古第三系の堆積岩がほぼ北東方向に走向している。新第三紀（鮮新世）から第四紀（更新世）の大岳、三角岳を中心とした火山活動による安山岩類や凝灰角礫岩類は、この白亜系、古第三系の堆積岩を不整合に覆っている（林2003）。本半島の山地群は木原山、主峰の大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地、三角岳火山系山地に分けられ、半島に占める平野部の割合は比較的少ない。

宇土半島基部に広がる平野は熊本平野南部の一部であり、旧白川や緑川、その支流の浜戸川の堆積によってできた沖積平野である。轟貝塚はこの沖積平野南西端に位置し、大岳火山系の山塊より東側に向けて舌状に派生した標高4～7m程度の丘陵先端部に立地する。貝塚周辺では東西約100m、南北約150mにわたって貝類の散布がみられる。基盤となる地質は、安山岩類や凝灰角礫岩類などの大岳火山岩類で、貝塚周辺は大岳火山系山地東麓の湧水や森林に恵まれるとともに、有明海を北に臨む良好な立地条件などから、縄文人の生活に適した自然環境であったことがうかがえる。

轟貝塚が位置する宇土半島基部周辺は、九州を代表する貝塚の密集地域であるが、これは波穏やかで豊富な魚貝類が生息する有明海に面するという立地的な要因が極めて大きいとみられている。

宇土半島北側に面する有明海は、九州西岸に位置する内湾で、南北約100km弱、東西約20km、面積は1,700km²である。潮汐による干満の差が日本一大きいことで知られており、湾奥部では6mにも達する。干潮時に露出する干潟の面積は有明海全体で約250km²もあり、日本沿岸の内湾中最大である（弘田2003）。宇土市沿岸の干潟は、海岸から約4kmの沖合まで海底が露出し、主に砂質であるが、場所によっては泥分が多い。

熊本平野から宇土半島地域にかけては約1万年前より堆積した有明粘土層と呼ばれる沖積層が形成されており、本層は有明海沿岸にも堆積している地質学的な鍵層である。

第2節 歴史的環境

(1) 轟貝塚周辺の遺跡

轟貝塚(1)周辺は、縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が残されている(第3図)。本貝塚周辺の主な縄文時代の貝塚・遺跡として、石ノ瀬遺跡(2)、西岡台貝塚(3)、馬場遺跡(4)、北園遺跡(5)がある。

石ノ瀬遺跡では、道路建設に伴う発掘調査で縄文時代早期の押型文土器(早水台式)が出土しており、近くに集落の存在が想定されている。轟貝塚中心部より東約100mの距離にある西岡台貝塚は、西岡台と呼称される標高約40mの独立丘陵西側裾部に位置している。1983・1984(昭和58・59)年の発掘調査で、ドングリなどの堅果類の貯蔵穴が5基検出された。馬場遺跡からは曽畑式土器が出土しており、北園遺跡は縄文時代から中世の包蔵地である。また、時期は明確ではないものの野鶴貝塚(6)や椿原貝塚(7)がある。

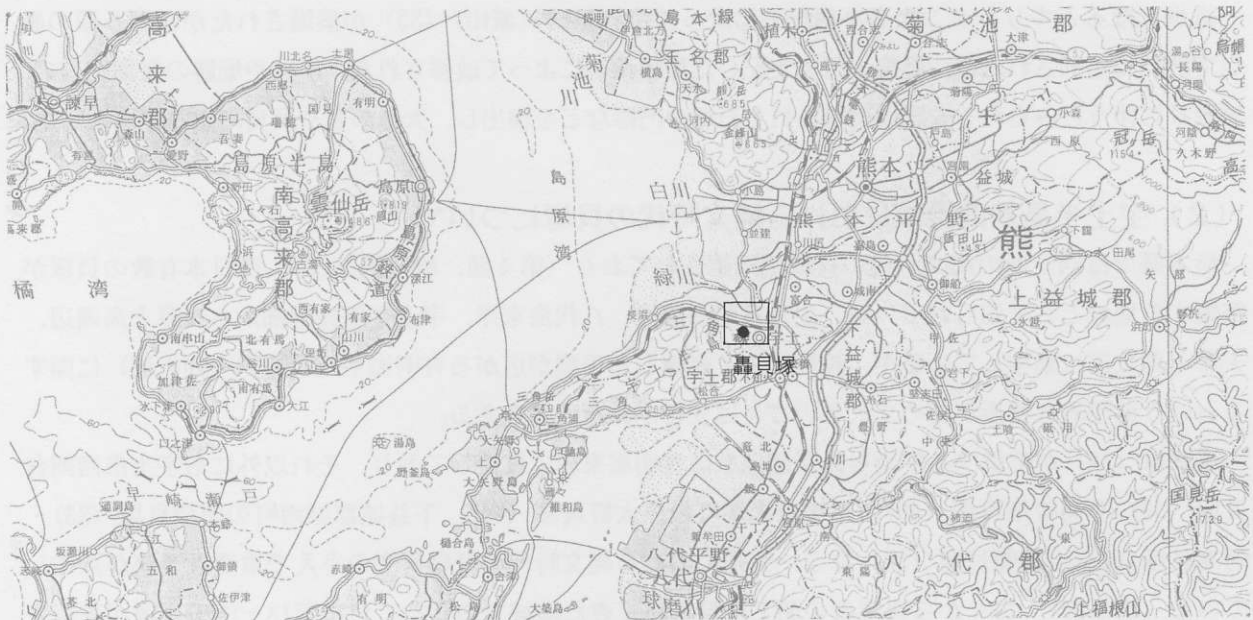
続く弥生時代の遺跡として、中期後半の黒髪式の甕形土器が出土した北平遺跡(8)、後期の集落とみられる下松山遺跡(9)がある。また、城山遺跡(10)は、前期から後期まで継続する拠点集落の可能性が高く、前期の環濠や中期の甕棺墓が発見されており、終末期の土器群が多量に出土した。

古墳時代になると、前期に巨大な首長居館が造営された西岡台遺跡(30)があり、城山遺跡には本首長居館と同時期に一般成員の集落が形成されていたとみられる。また、首長居館と対応するように、熊本県最古の前方後円墳で舶載三角縁神獣鏡が出土した城ノ越古墳(11)や迫ノ上古墳(12)、スリバチ山古墳(13)、天神山古墳(14)など前期の前方後円墳が相次いで築造された。これらの前方後円墳は、西九州を代表する前期の首長墓系譜であり、当時、宇土半島基部が肥後地域の政治的中心地であったと考えられる。しかし、中期以降、前期以来の首長墓系譜は断絶し、前方後円墳は築造されなくなる。前方後円墳以外では、前期の円墳とみられる神合古墳(15)や猫ノ城古墳(16)、西岡台箱式石棺(17)、中期の所産とみられる椿原石蓋土壙墓(18)がある。

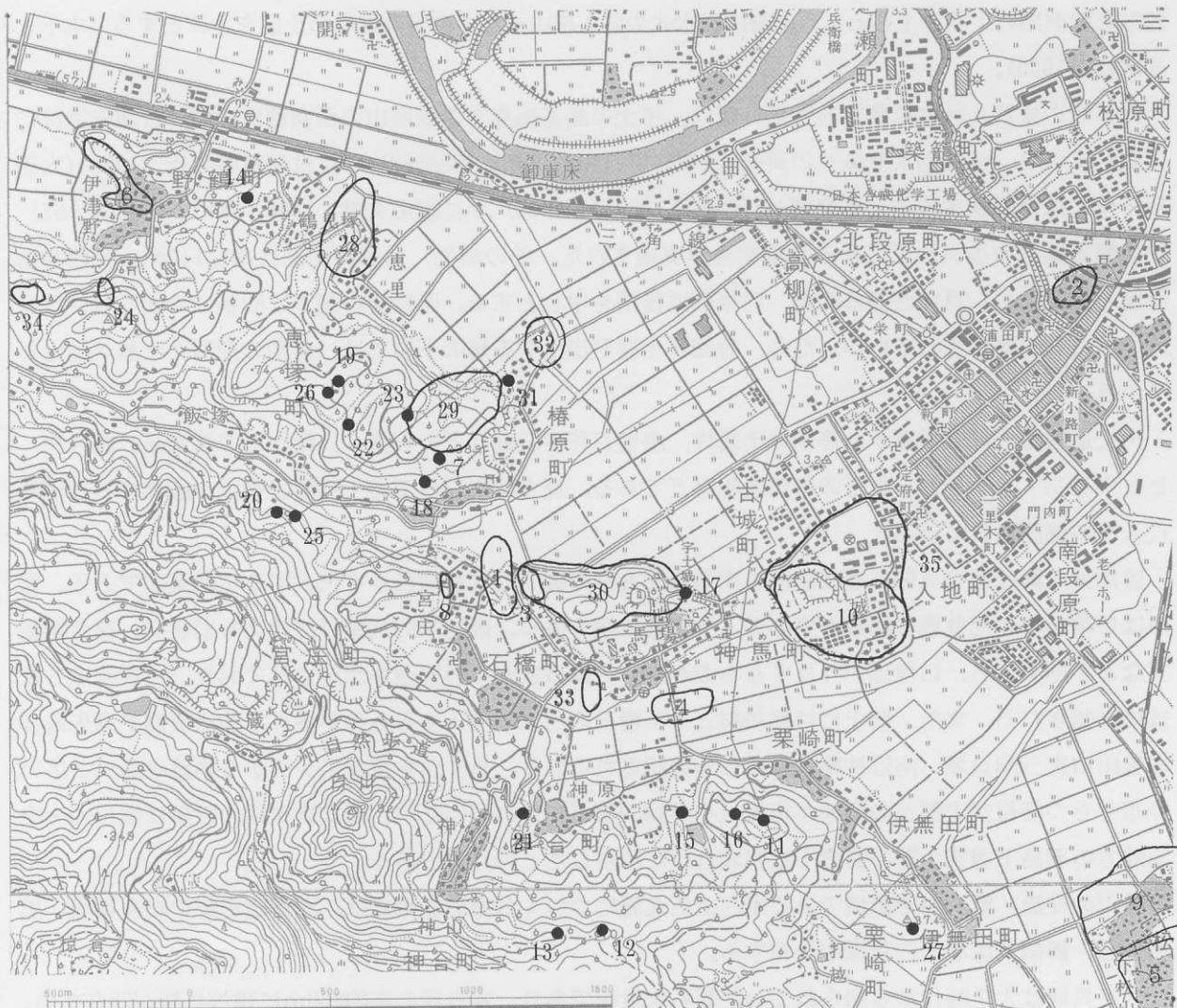
後期から終末期になると横穴式石室を主体部とする東畑古墳(19)、仮又古墳(20)、山王平古墳(21)、金嶽山古墳(22)などの円墳や、県下で唯一の終末期の方墳である椿原古墳(23)などが築造された。多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群(24)や仮又2号墳(25)、東畑2号墳(26)も後期に属するとみられる。その他、築造時期が不明の久保1・2号墳(27)があり、恵里遺跡(28)や椿原遺跡(29)は古墳時代の包蔵地である。

古代には西岡台遺跡や城山遺跡で須恵器や土師器が出土しており、前者では故意に破碎された土馬も出土している。中世になると宇土氏・名和氏が居城した宇土城跡(西岡台)(30)が築城された。主郭(千畳敷)やその西側に位置する曲輪(三城)の発掘調査で、掘立柱建物跡や横堀跡、門跡などが検出され、大量の土師質土器や瓦質土器、青磁・白磁・染付などの貿易陶磁器が出土した。

椿原遺跡では方形居館の溝とみられる箱堀が検出されており、本遺跡に隣接する名和家菩提寺の曹洞宗宗福寺跡(31)には、名和武顕や同行興の位牌、同行直の墓石が残されており、眼下の椿原字船津周辺には中世の港湾施設である宇土津(32)が存在したとみられている。また、陳の前遺跡(33)や伊津野遺跡(34)でも中世の土器・陶磁器が出土している。



第2図 轟貝塚の位置 (1/600,000)



第3図 轟貝塚周辺遺跡分布図 (1/25,000、図中番号は本文と対応)

近世になるとキリシタン大名小西行長によって宇土城跡（城山）（35）が築城されたが、関ヶ原の戦いで敗れて処刑された後、肥後一円を支配した加藤清正によって改修された。本丸や堀跡の発掘調査で、城破りに伴うとみられる故意に破壊された石垣や門跡などを検出し、大量の瓦や貿易陶磁器が出土した。

（2）宇土半島基部地域における縄文時代の貝塚について

熊本県では84ヶ所の縄文時代の貝塚が確認されており（第4図、帆足編2005）、西日本有数の貝塚が密集する地域として知られている。主に有明海東岸、八代海東岸、宇土半島先端部から天草上島周辺、天草下島北部に集中しているが、遠浅でよく発達した干潟が広がる有明海や八代海（不知火海）に面するという地理的な要素が極めて大きいことは先にふれた通りである。

轟貝塚（38）が位置する宇土半島基部地域は有明海東岸に位置しており、それ以外にも宇土市西岡台貝塚（39）や同曾畑貝塚（40）、宇城市松橋町松橋大野貝塚（44）、下益城郡城南町の黒橋貝塚（33）・阿高貝塚（34）・御領貝塚（35）など、九州における縄文時代の貝塚研究のうえで重要な遺跡が点在している（第5図）。古くから研究者の間で注目されてきた地域であり、これまで18ヶ所の貝塚が確認されている。

轟貝塚中心部から東約100mに位置する西岡台貝塚は、貝層が2つに大別され、下層が轟・曾畑式土器などの前期の土器を主体とし、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とする（木下・高木ほか1985）。

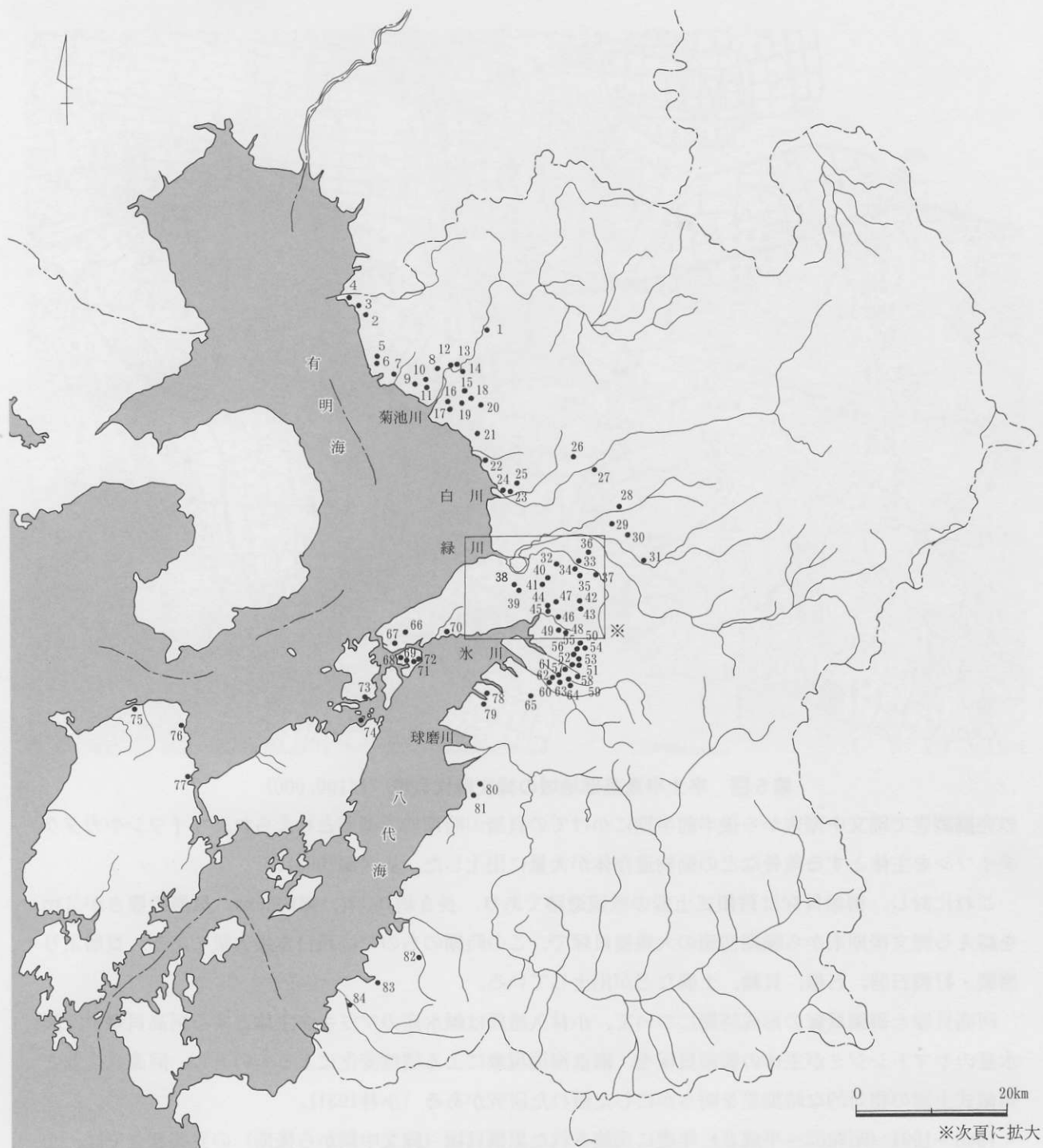
轟貝塚の東約4kmに位置する曾畑貝塚は、宇土半島基部東方の雁回山の西南麓につづく台地先端部に位置しており、明治期より多くの研究者が訪れている。1890（明治23）年には若林勝邦氏、1923（大正12）年には清野謙次氏による発掘が行われ、1959（昭和34）年に慶応大学、1986・1987（昭和61・62）年に熊本県教育委員などによる発掘調査が実施された。その結果、貝塚の範囲は南北140m、東西40m程度と推定され、貝塚西側は前期、同東側は後期を中心とする。県教委の調査で62基にのぼるドングリの貯蔵穴群が確認されている。なお、曾畑式土器が出土する層の下層では、早期の押型文土器が出土している。

出土遺物は、縄文早期から後期の土器片、磨製石斧や石匙などの石器、貝輪などの装飾品、網み物、ヒョウタン・イチイガシなどの自然遺物などである。縄文時代以外でも土師器と管玉が副葬する古墳時代人骨が確認されている。

曾畑式土器は曾畑貝塚を標識遺跡とする西北九州の縄文時代前期後半を代表する土器型式である。器形はU字形をした丸底の深鉢が中心で、その他に壺もある。幾何学的な平行沈線文や羽状文、複合鋸歯文などが施文され、口縁部が外反するものが多い。轟B式からの変遷が想定されており、大きくは3型式に分類される。また、胎土には混和材として滑石の粉末が混入するものが多く、北は朝鮮半島先端部の釜山市東三洞貝塚、南は沖縄本島からも確認されており、早くから東北アジアから朝鮮半島へと広い分布をもつ櫛目文土器との関連が指摘（小林1939など）されていたが、轟式終末期の段階に瀬戸内・中国地方の羽島下層式土器の影響下に西北九州に出現したとの見方もある。

緑川の支流・浜戸川中流域である雁回山西北麓につづく台地の北端には、国指定史跡の阿高貝塚、黒橋貝塚、御領貝塚などの貝塚が分布する。

阿高貝塚は大正時代から知られていた著名な貝塚であり、本貝塚の南約300mに御領貝塚が所在する。前者は器壁に太形凹線が施文される縄文時代中期に位置づけられる阿高式土器の標識遺跡である。近年



- | | | | | | |
|-------------|---------------|-----------|--------------|--------------|-------------|
| 1 若園貝塚 | 2 宮内貝塚 | 3 境崎貝塚 | 4 四山貝塚 | 5 堀崎貝塚A | 6 堀崎貝塚B |
| 7 腹赤貝塚 | 8 尾崎貝塚 | 9 浜田貝塚 | 10 庄司(貝島)貝塚 | 11 古閑原貝塚 | 12 繁根木貝塚 |
| 13 保田木貝塚 | 14 桃田貝塚 | 15 片諏訪貝塚 | 16 ビナワラ貝塚 | 17 キャアガラワラ貝塚 | 18 竹崎貝塚 |
| 19 久島貝塚 | 20 尾田貝塚 | 21 湯の浦貝塚 | 22 中川内平(平)貝塚 | 23 北内潟貝塚 | 24 千金甲菖蒲谷貝塚 |
| 25 川戸貝塚 | 26 打越貝塚 | 27 渡鹿貝塚 | 28 沼山津貝塚 | 29 カキワラ貝塚 | 30 甘木貝塚 |
| 31 辺田見貝塚 | 32 ソビエ石貝塚 | 33 黒橋貝塚 | 34 阿高貝塚 | 35 御領貝塚 | 36 今村貝塚 |
| 37 敷田貝塚 | 38 轟貝塚 | 39 西岡台貝塚 | 40 曾畑貝塚 | 41 古保里貝塚 | 42 北萩尾貝塚A |
| 43 北萩尾貝塚B | 44 松橋大野貝塚 | 45 松橋貝塚 | 46 上久貝貝塚 | 47 曲野貝塚 | 48 仲間貝塚 |
| 49 宮島貝塚 | 50 年の神貝塚 | 51 瀬戸貝塚 | 52 セツ江カキワラ貝塚 | 53 竹ノ下貝塚 | 54 中小野貝塚 |
| 55 引地貝塚 | 56 大坪貝塚 | 57 四ツ江貝塚 | 58 土穴瀬貝塚 | 59 段貝塚 | 60 大野貝塚 |
| 61 赤迫A貝塚 | 62 赤迫B貝塚 | 63 西平貝塚 | 64 大瀬田貝塚 | 65 有佐貝塚 | 66 州の上貝塚 |
| 67 際崎貝塚 | 68 小崎貝塚 | 69 辺田貝塚 | 70 西木の浦貝塚 | 71 道の峯貝塚 | 72 浜の州貝塚 |
| 73 柳貝塚 | 74 前島貝塚 | 75 沖ノ原貝塚 | 76 一尾貝塚 | 77 大矢貝塚 | 78 産島貝塚 |
| 79 郡築十二番町遺跡 | 80 五反田貝塚 | 81 田ノ川内貝塚 | 82 橋本貝塚 | 83 浜崎貝塚 | 84 南福寺貝塚 |

第4図 熊本県縄文時代貝塚分布図 (1/800,000、帆足編2005を一部改変)



第5図 宇土半島基部地域の縄文時代貝塚 (1/100,000)

の発掘調査で縄文中期末から後半前半期にかけての貝層の時期的変遷がとらえられ、マイワシやカタクチイワシを主体とする魚骨などの動物遺存体が大量に出土した(帆足編2005)。

これに対し、御領貝塚は御領式土器の標識遺跡であり、長さ約100m、幅約30m、貝層の厚さが2mを越える縄文後期末から晩期初頭の大規模貝塚で、この時期のものでは西日本最大級である。貝層より磨製・打製石器、石鏃、貝輪、土偶などが出土している。

阿高貝塚と御領貝塚の形成時期について、小林久雄氏は鹹水産のマガキを主体とする阿高貝塚と、淡水産のヤマトシジミが主体の御領貝塚を、海進海退現象による環境変化によるものとし、阿高式土器と御領式土器の相対的な時期差を明らかにした優れた研究がある(小林1931)。

1988～1991(昭和63～平成3)年度に実施された黒橋貝塚(縄文中期から後期)の発掘調査では、土壙が73基検出され、縄文時代中・後期の土器を編年するうえで重要な資料が出土するとともに、石器や骨角器、貝製品、獣骨や魚骨、ドングリが大量に出土した(高木・村崎編1998)。

以上、宇土半島基部周辺地域だけでも縄文時代早期末から前期の轟式土器、同前期後半の曾畑式土器、中期の阿高式土器、後期末から晩期初頭の御領式土器が標識土器として型式設定されており、学史的にも遺跡の内容からみても、九州の縄文文化を語る上で欠くことができない貝塚が分布する地域といって差し支えないだろう。これらの貝塚以外でも、鳥居龍蔵氏や清野謙次氏が調査を行った松橋大野貝塚や、曾畑式土器出土層の下層から轟式土器が出土した宇城市松橋町宮島貝塚などの、学史的・学術的に貴重な貝塚が所在している。

宇土半島基部地域の北側にあたる熊本平野周辺部では、曾畑式土器が出土した上益城郡嘉島町カキワ

ラ貝塚や、阿高式土器が出土した熊本市渡鹿貝塚など10ヶ所の貝塚が確認されている。また、宇土半島基部地域南側の氷川が貫流する八代平野北部では、西平式土器の標識遺跡であり、1879（明治12）年に E. W. モースによって発掘調査が行われた八代郡氷川町大野貝塚や、中・後期の貝塚である八代市鏡町有佐貝塚など16ヶ所の貝塚が分布する。

このように熊本平野から宇土半島基部地域、八代平野北部にかけては、県内の5割強の貝塚が分布しており、熊本県のみならず九州でも特に多くの貝塚が形成された地域である。九州及び西日本の縄文時代研究を進めるうえで極めて重要な地域であることを示しているといえよう。

引用・参考文献

- 池田 朋生 2002 「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 今田 治代 2002 「西平貝塚」『竜北町遺跡地図－竜北町遺跡詳細分布調査－』竜北町文化財調査報告第2集 竜北町教育委員会
- 江本 直編 1988 『曾畑』－熊本県宇土市花園町 曾畑貝塚・低湿地の調査－熊本県文化財調査報告第100集 熊本県教育委員会
- 小田 文弘 2003 「宇土半島と宇土市」『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市
- 乙 益重隆 1959 「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」『日本考古学年報』8 日本考古学協会
- 金田 一精 2002 「古保里貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 木下洋介・高木恭二ほか 1985 『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集 宇土市教育委員会
- 小林 久雄 1931 「阿高貝塚及び御領貝塚の土器について」『地歴研究』7－3～8 熊本地歴研究会
- 小林 久雄 1935 「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第1巻第2号 東京考古学会
- 小林 久雄 1939 「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11 雄山閣
- 坂本 経堯 1983 『肥後上代資料集成』肥後上代文化研究会
- 杉村 彰一 1962 「曾畑式土器文化に関する一考察」『熊本史学』33号 熊本史学会
- 高木正文・村崎孝宏編 1998 『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第166集 熊本県教育委員会
- 富田 紘一 1996 「渡鹿貝塚」『新熊本市史』史料編第1巻 考古資料 熊本市
- 林 行敏 2003 「宇土半島の地質」『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市
- 帆足 俊文 2002 「曾畑貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 帆足俊文編 2005 『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告第223集 熊本県教育委員会
- 平山修一・高木恭二 1977 「轟貝塚（西岡台地区）の調査」『宇土城跡（西岡台）』－本文編－宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 弘田禮一郎 2003 「有明海の自然」『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市
- 藤本 貴仁 2005 『轟貝塚・馬門石石切場跡』－宇土市内遺跡範囲確認調査概報－宇土市埋蔵文化財調査報告書第27集 宇土市教育委員会
- 藤本 貴仁 2006 「轟貝塚」『轟貝塚 馬門石石切場跡』－宇土市内遺跡範囲確認調査報告書－宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集 宇土市教育委員会
- 古森 政次 2002 「西岡台貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 古森政次・金田一精 2003 「縄文時代」『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市
- 松本雅明・小林久雄ほか 1965 『城南町史』城南町史編纂会
- 山崎 純男 2004 「九州縄文土器の編年」『先史・古代東アジア出土の植物遺存体』（2）平成13～15年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書

第3章 轟貝塚における過去の調査について

轟貝塚では大正期より発掘調査が実施され、轟式土器の標識遺跡となった学史的にも重要な貝塚であることは先に述べた。以下では、これまで実施された大正期から平成期の調査概要を記すことにしたい(第6・7図)。

第1節 大正期の調査

(1) 第1次調査

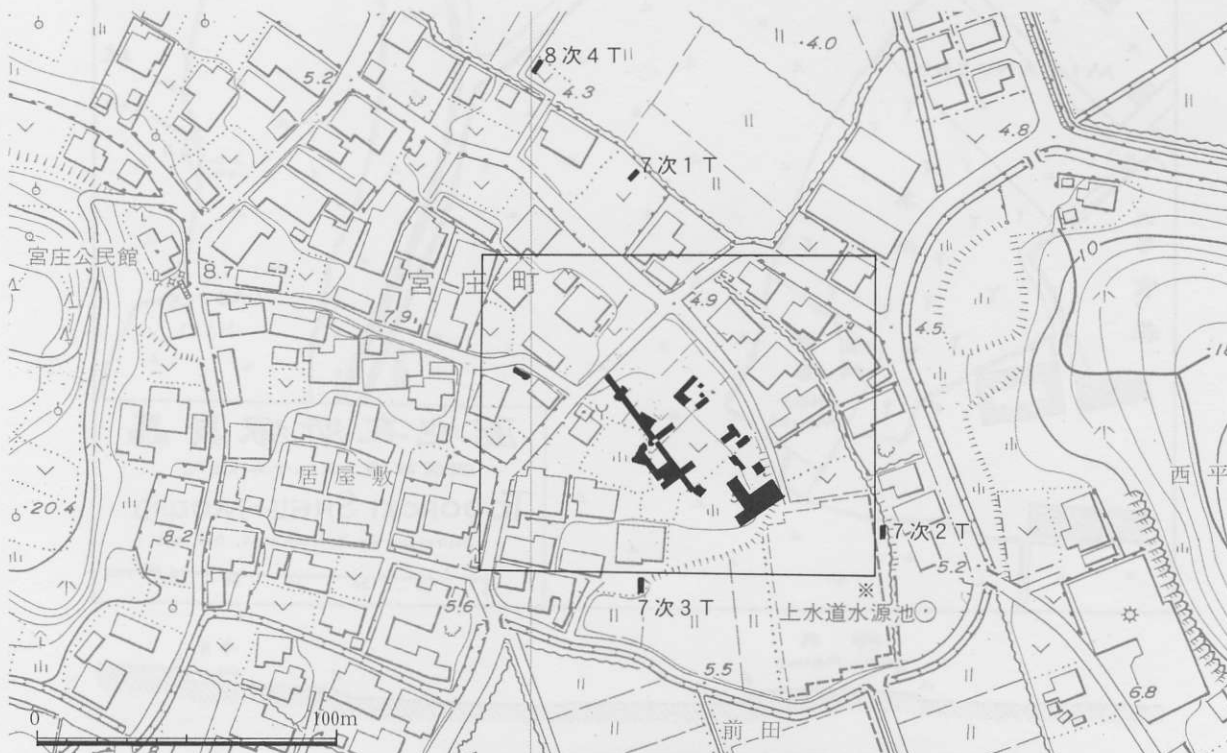
1917(大正6)年、鈴木文太郎氏をはじめとする京都帝国大学及び熊本医学専門学校により発掘調査が実施され、男女各1体の人骨が発見された。鈴木氏は兩人骨や岡山県津島貝塚、大阪府国府遺跡の出土人骨と現代日本人との形質比較や、我が国の石器時代人について論及した(鈴木1917・1918)。

(2) 第2次調査

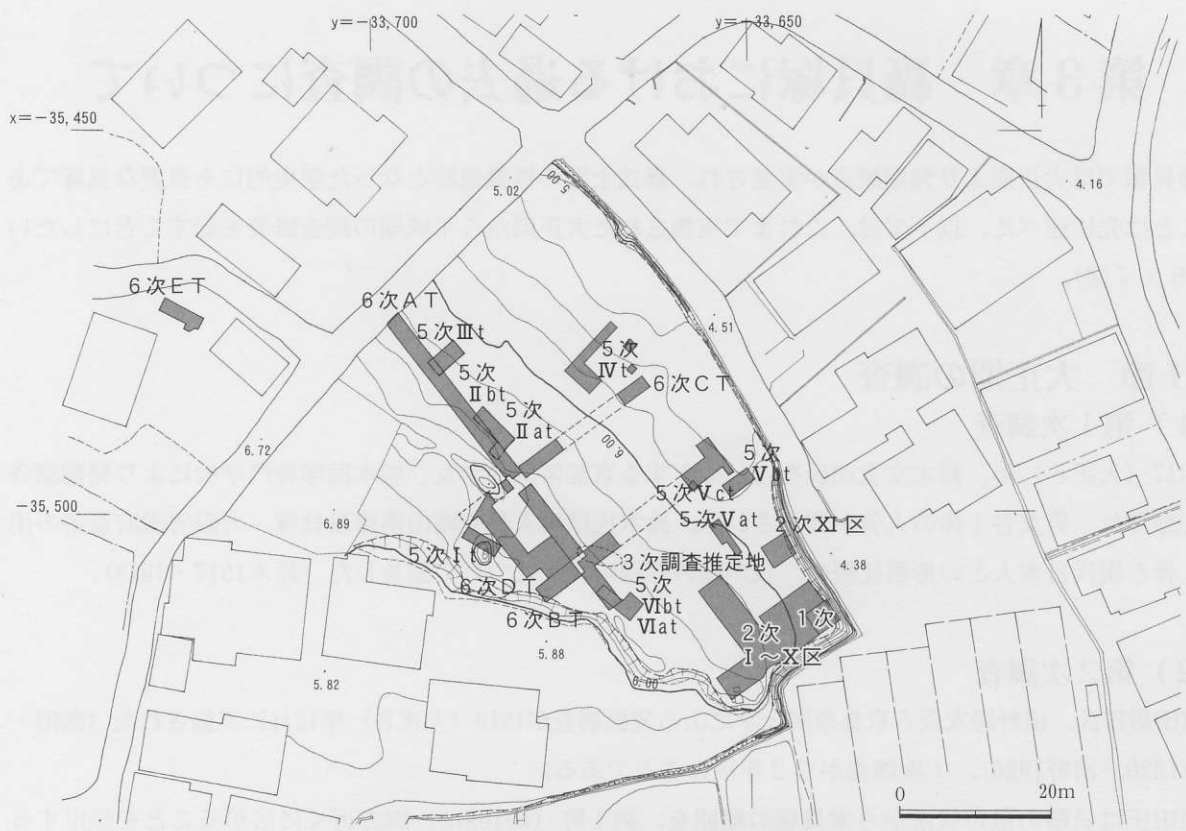
濱田耕作氏、清野謙次氏ら京都帝国大学による発掘調査が1919(大正8)年12月に実施された(濱田・榊原1920、清野1920)。1次調査から2年後のことである。

濱田氏は貝殻の散布状況から本貝塚の範囲を、約1町(約109m)四方近くに広がることを想定するとともに、轟貝塚の東方に位置する西岡台貝塚についても記録にとどめている(第8図)。調査は12月17日に開始し、同23日に終了した。調査区は鈴木氏が発掘した地点の隣接地に設定した(第9図)。

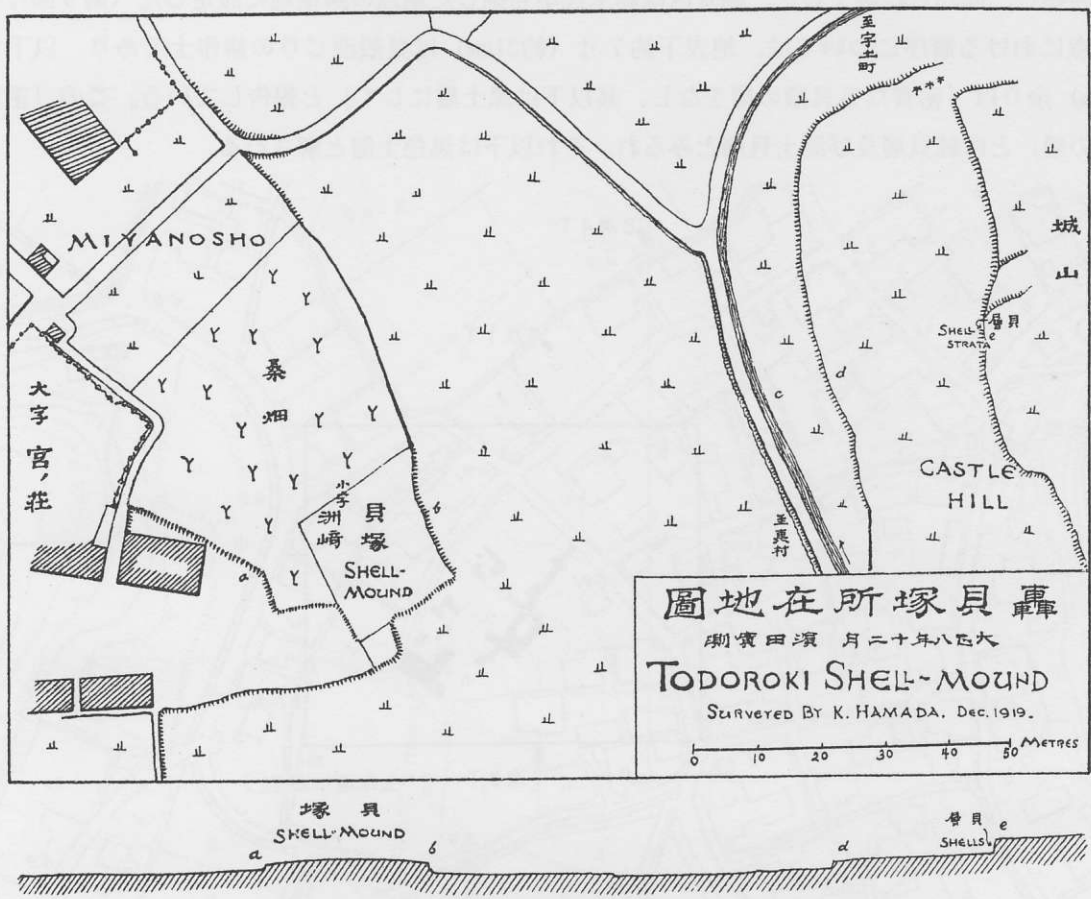
本地点における層序については、地表下約7寸(約21cm)は貝殻混じりの耕作土であり、以下2尺(約60cm)余りは「密實なる貝殻の層をなし、其以下は黒土層にして」と報告している。この「密實なる貝殻の層」とは純貝層及び混土貝層とみられ、それ以下は黒色土層と解される。



第6図 第1・2、5～8次調査における轟貝塚調査区配置図(1/2,500、※部分は次頁)



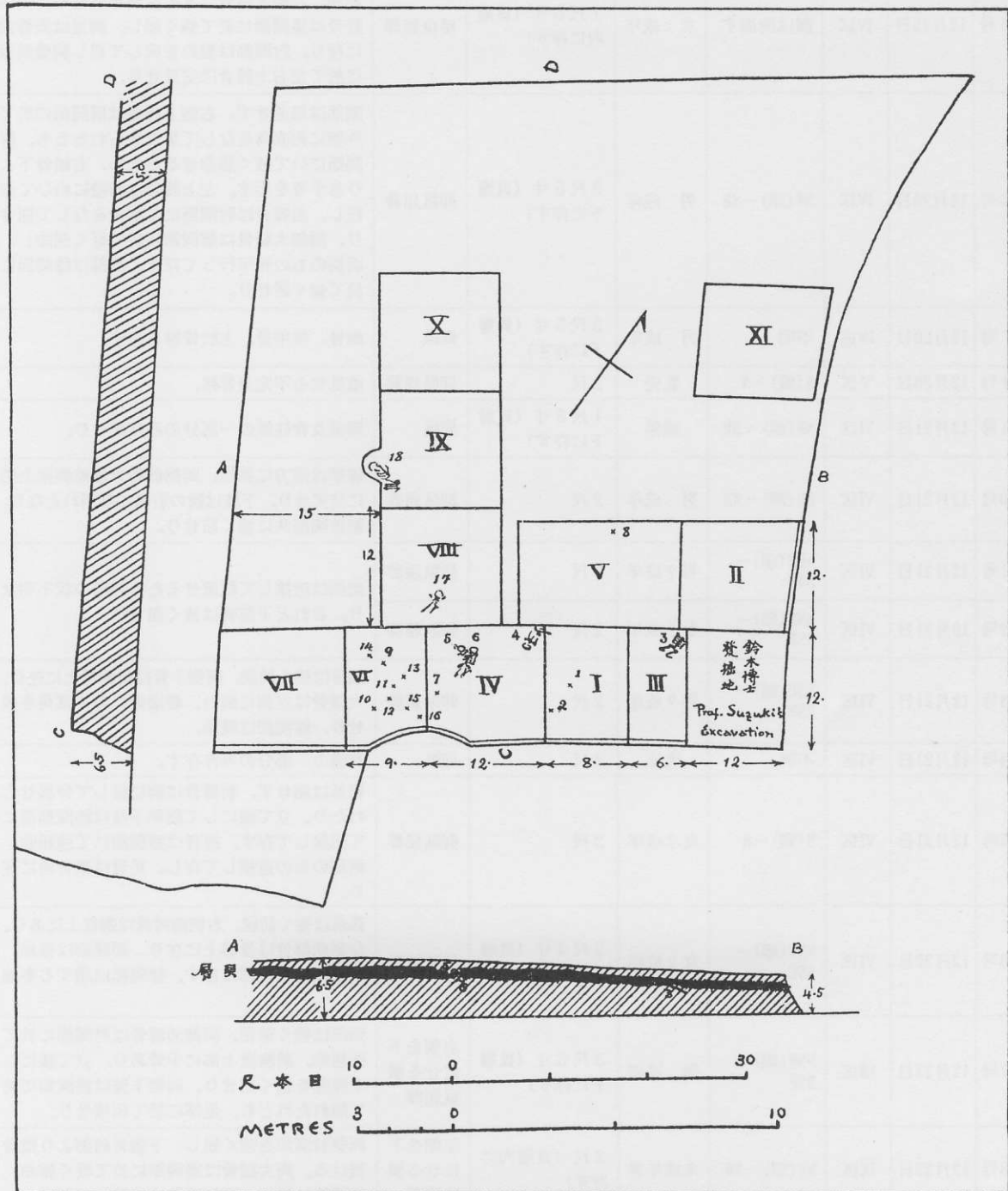
第7図 轟貝塚中心付近の調査区配置図 (1/500)



第8図 第2次調査当時の周辺地形図 (1/1,200、濱田・榊原1920)

調査の結果、轟式土器や石器、装身具などが出土するとともに、I区で散乱状態の第1・2号人骨、III区の隅角で貝輪を装着した人骨、IV区では第4～7号人骨の4体、V区では乳児人骨、VI区では第9～16号人骨、VIII区で第17号人骨、IX区で第18号人骨が出土した（第1表）。これらの人骨は多くが屈葬であり、分布状態は著しく不規則であった。

人骨はおおむね地表下2尺（約60cm）前後で検出されているが、1尺（約30cm）～3尺（約90cm）余りと幅があり一定していない。具体的には、人骨18体のうち10体は貝層最下部より貝層下有機土（黒色土層）にわたって存在する。清野氏が「発掘が進みて貝層が将に尽きんとする頃に骨格の一部が（多くの場合に於て膝関節部又は頭骸骨）が現はるゝを常とせり」（清野1920）としていることから、貝層がほ

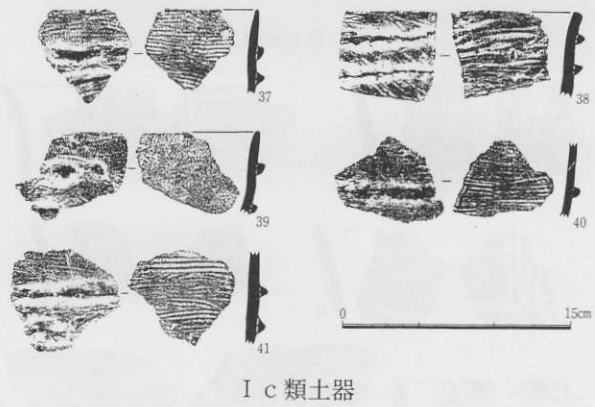
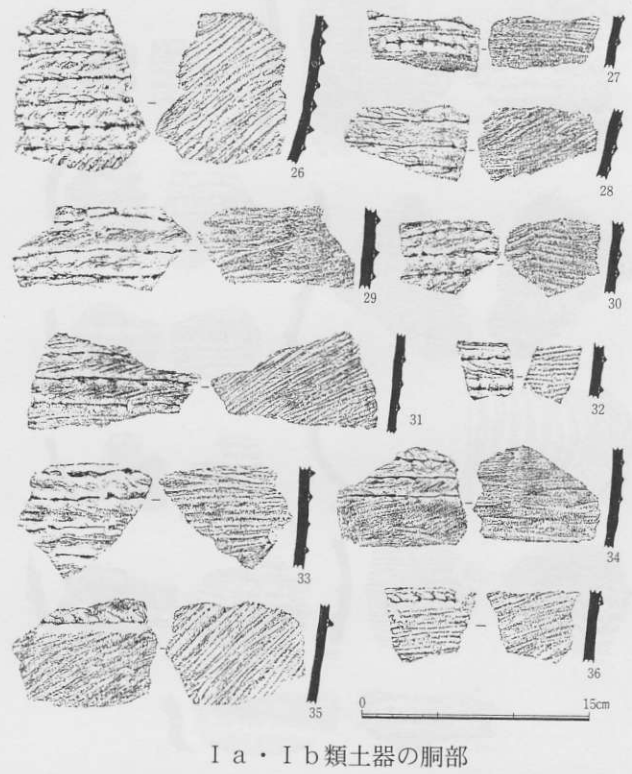
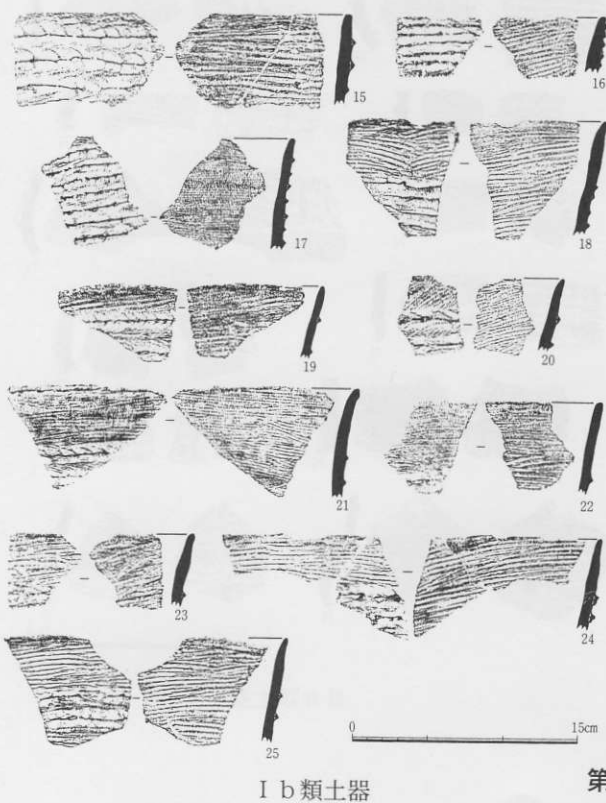


第9図 第2次調査人骨配置図 (1/200、濱田・榊原1920)

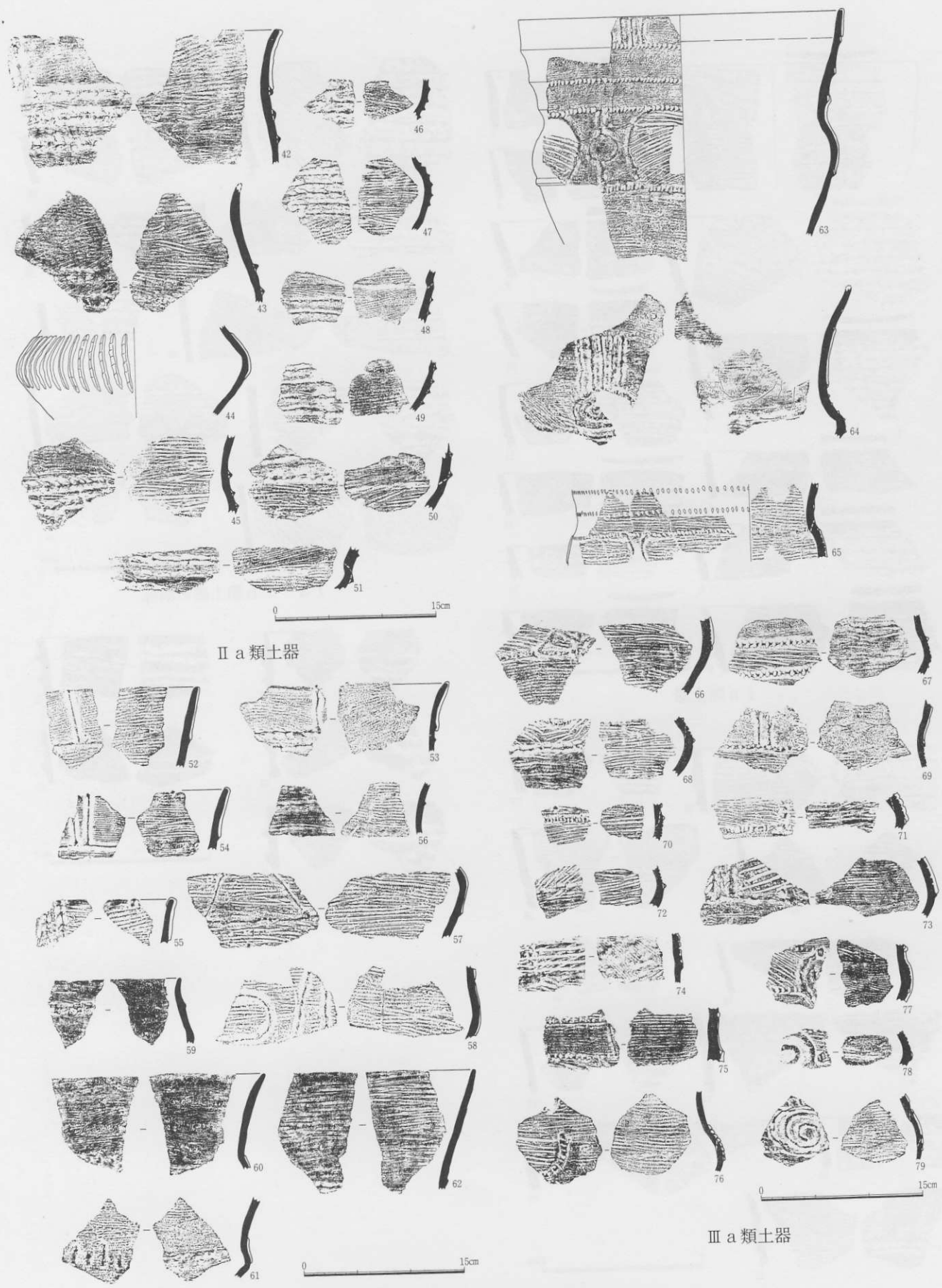
第1表 第2次調査における出土人骨一覧(清野1920、旧字を新字に改変)

番号	発掘月日	調査区	人骨の方向	性(年齢)	地表より存在 部位迄の深さ	葬位	身体各部の位置
第1号	12月17日	I区	不明	成年	2尺7寸-3尺	不明	散乱せる不完全骨格。
第2号	12月17日	I区	不明	乳児	2尺7寸-3尺	不明	散乱せる不完全骨格。
第3号	12月17日	III区	NE(頭)-SW	女 成年	3尺	仰臥屈葬	頭部なし。右上半身及右大腿のみ存す。右前 膊部を弱く屈し。右手は胸部に存す。
第4号	12月19日	IV区	S(頭)-N	男 成年	1尺(貝層内に 存す)	仰臥屈葬	頸部は屈せず。両側前膊骨は肘関節にて直角 に屈曲し前胸壁下部に存す。大腿骨は腰関節 にて軽く屈曲し、両側のもの平行に位置せり。 膝関節は強屈曲。
第5号	12月19日	IV区	顔は南面す	女 成年	1尺5寸(貝層 内に存す)	座位屈葬	頸部は軽く前屈。右大腿骨は腰関節に於て強 屈曲。左側大腿骨は凡そ直角を成せり。両側 脛骨は膝関節に於て強く屈し、両足は座骨前 に在り。肘関節は鋭角を成して屈し胸壁前面 に於て左右上膊骨は交叉せり。
第6号	12月20日	IV区	NW(頭)-SE	男 成年	2尺5寸(貝層 下に存す)	仰臥屈葬	頸部は屈曲せず。右側上膊骨は肩関節に於て 外側に約直角をなして挙上せられたるも、肘 関節にいて強く屈曲せるがため、右鎖骨下よ り右手骨を出す。左上膊骨は胸壁に沿ひて存 在し、前膊骨は肘関節にて直角をなして屈せ り。両側大腿骨は腰関節に於て軽く屈曲し、 両側のもの相平行して存す。脛部は膝関節に 於て強く屈せり。
第7号	12月20日	IV区	不明	男 成年	2尺5寸(貝層 下に存す)	仰臥	頭骨、肩甲骨、上肢骨等を存す。
第8号	12月20日	V区	S(頭)-N	乳児	2尺	仰臥屈葬	散乱せる不完全骨格。
第9号	12月21日	VI区	NW(頭)-SE	成年	1尺5寸(貝層 下に存す)	仰臥	頭部及脊柱等の一部分のみ存在せり。
第10号	12月21日	VI区	SE(頭)-WN	男 成年	2尺	仰臥屈葬	頭部は前方に強屈。両側前膊骨は前胸壁上部 に交叉せり。下肢は體の右側に横倒れとなり。 腰膝関節共に強く屈せり。
第11号	12月21日	VI区	NEE(頭)- SWW	男?成年	2尺	仰臥屈葬	両側は近接して位置せるため詳細の状不明な り。されど下肢骨は強く屈せり
第12号	12月21日	VI区	NNE(頭)- SSW	女?成年	2尺	仰臥屈葬	
第13号	12月21日	VI区	SSE(頭)- NNW	男?成年	2尺	仰臥屈葬	頸部は強く前屈。両側手骨は前胸壁上に在り。 大腿骨は左側に倒れ、腰関節に於て直角を成 せり。膝関節は強屈。
第14号	12月21日	VI区	不明	乳児	2尺	仰臥	身體の一部分のみ存在す。
第15号	12月21日	VI区	S(頭)-N	女?成年	2尺	仰臥屈葬	頸部は屈せず。前膊骨は胸に接して伸展せら れたり。立て膝にして両側下肢は膝関節部に て相接して存す。脛骨は膝関節にて強屈曲。 両側のもの近接して存し、足骨は座骨前に在 り。
第16号	12月22日	VI区	NNW(頭)- SSE	女?成年	2尺4寸(貝層 下に存す)	仰臥屈葬	頸部は強く前屈。右側前膊骨は胸壁上にあり。 左側前膊骨は骨盤上に在り。腰関節は強屈。 両側膝部は腹部に存す。膝関節は屈する事強 し。
第17号	12月23日	VIII区	NNW(頭)- SSE	男 成年	3尺5寸(貝層 下に存す)	右側を下 にせる横 臥屈葬	頸部は強く前屈。両側前膊骨は肘関節に於て 強屈曲。前胸壁上部に手骨あり。立て膝にし て脛部を強く屈せり。両側下肢は膝関節に於 て離れたれども、足部に於て相接せり。
第18号	12月23日	IX区	NE(頭)-SW	未成年者	2尺(貝層内に 存す)	左側を下 にせる横 臥屈葬	両側肘関節を強く屈し、下顎骨前部より指骨 現はる。両大腿骨は腰関節に於て軽く屈曲。 膝関節に強屈。両側下肢は相接して存す。

(注意) 第9号人骨乃至15号は相接近して存し、四肢骨の何れに属せりや不明瞭成るもの多し。骨格研究時には一括して示す可し



第10図 第2次調査出土轟B式土器1 (1/5、宮本1990)

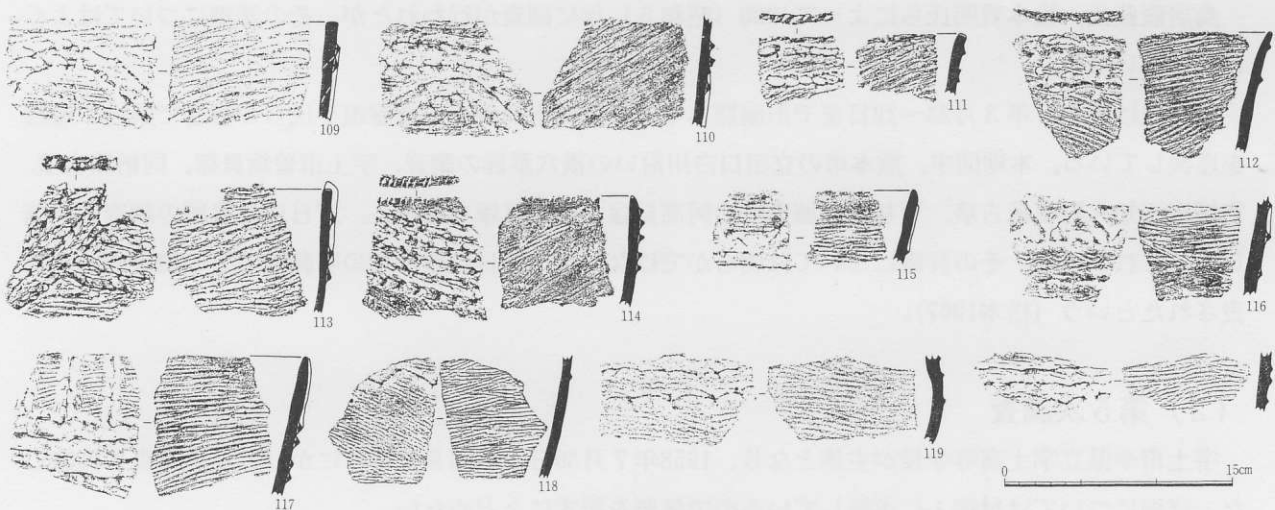
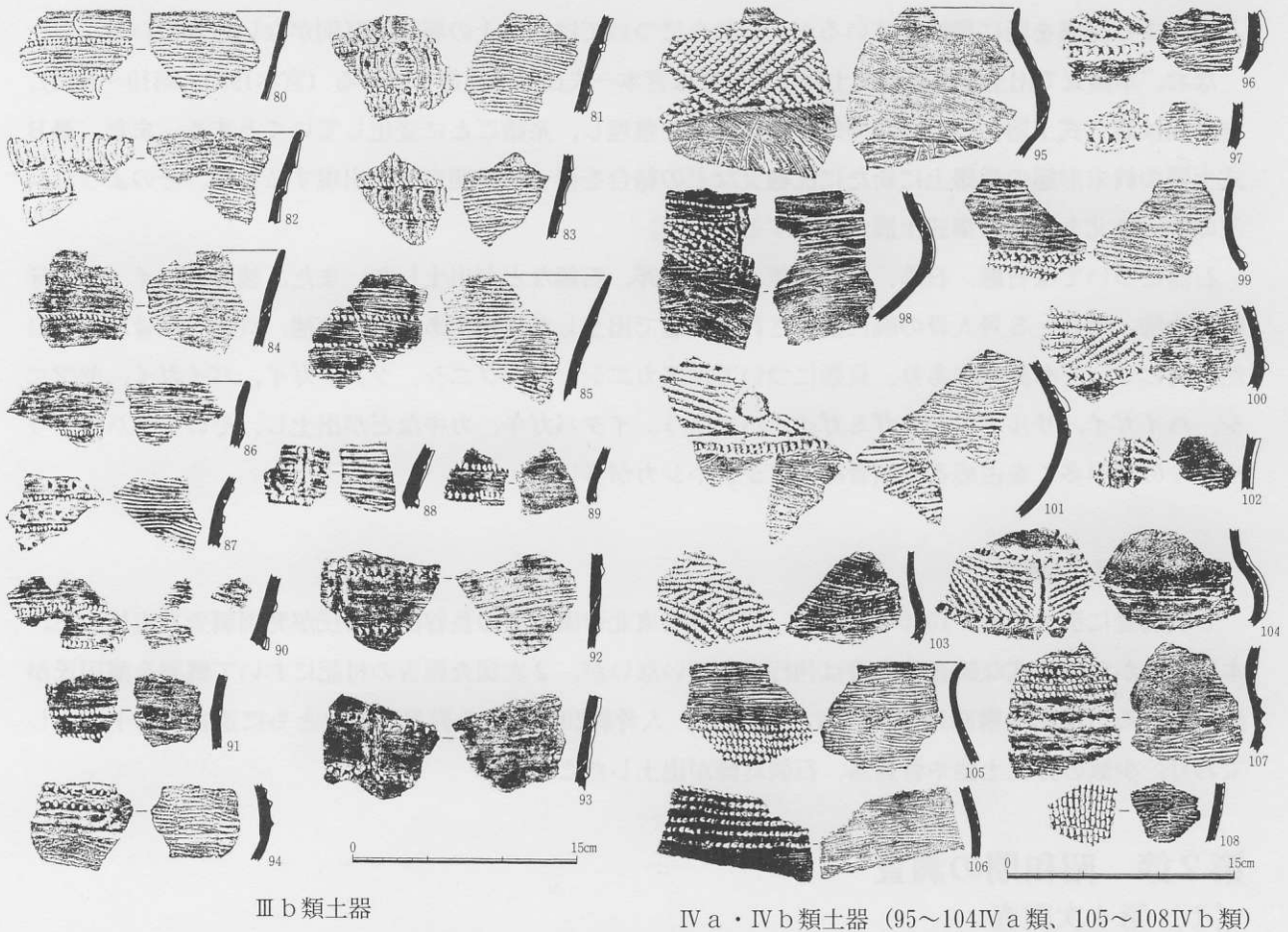


II b・II c 類土器 (52~58 II b 類、59~61 II c 類)

第11図 第2次調査出土轟B式土器2 (1/5、宮本1990)

ば無くなる位置（貝層最下部から黒色土層上面）で人骨が検出されたことがわかる。また、18例中3例は貝層中、同5例は貝層下の有機層（黒色土層）で発見されている。ただし、これらはあくまで人骨の発見位置であり、墓壇の検出層位ではない点は注意すべきであろう。

出土した遺物のなかで最も多くを占めるのが土器で数百点にのぼる。このうち12点は祝部土器（須恵器）に類するもの、また近代の磁器片が出土したが、これらは攪乱とみられる貝層上部から出土し、そ



第12図 第2次調査出土轟B式土器3 (1/5、宮本1990)

れ以外は「貝塚式土器」（縄文土器）であり、弥生式土器は出土していないと記述している。土器の破片は各調査区とも散乱した状態で比較的完形に近いものは発見できなかったという。

濱田氏は出土した縄文土器を（イ）隆起細帯文、（ロ）変様縄席紋、（ハ）爪形及変様爪形紋、（ニ）波線直線紋、（ホ）各種直線紋、（ヘ）刷毛及篋目紋、（ト）太形凹紋の7類に分類した。これらについては、（イ）・（ロ）・（ハ）は轟B式、（ニ）は轟C式、（ホ）は轟A式、（ヘ）は轟D式、（ト）は阿高式土器に相当しよう。（イ）・（ハ）より（ニ）が新しい特徴を有することを指摘しており、現在の編年観と共通する認識を既に指摘しているが、これらについては、出土の層位的区別がないとしている。

なお、本調査で出土した轟B式土器については宮本一夫氏が再検討している（宮本1990、第10～12図）。宮本氏は轟B式土器について時間的な位置関係を整理し、系譜ごとに変化していくとする。また、轟B式土器の終末形態の系譜上に新たに沈線文などの結合を伴った中間形式が出現するとし、そのような状況の中、西北九州に曾畑式土器が成立するとした。

石器については石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、石錘などが出土した。また、装身具はイノシシ牙製の垂飾、第3・5号人骨の腕に装着された状態で出土した貝輪である。その他、貝類や獣骨などの自然遺物についても記載があり、貝類についてはアカニシ、テングニシ、ツメタガイ、バイガイ、ヤマニシ、ハイガイ、サルボウ、カガミガイ、ハマグリ、イタバガキ、カキなどが出土し、そのうちハマグリやカキの類が多くを占める。獣骨はイノシシやシカが多い。

（3）第3次調査

2次調査に引き続き、1920（大正9）年7月に東北帝国大学の長谷部言人氏が発掘調査を実施した。本調査にかかる正式な調査報告書は刊行されていないが、2次調査報告の付記において概要を濱田氏が記している（濱田・榊原1920）。これによると、人骨約20体余りを発見するとともに遺物が若干出土しており、少数の弥生土器や骨角器、石製耳飾が出土したという。

第2節 昭和期の調査

（1）第4次調査

鳥居龍蔵氏、松本雅明氏らによって1930（昭和5）年に調査が行われたが、その詳細についてはよくわかっていない。

鳥居氏は昭和5年3月23～29日まで旧制熊本中学（現熊本高校）の進藤坦平氏らの招きで県内の遺跡を巡検している。本期間中、熊本市の立田口白川沿いの横穴墓群の調査、宇土市曾畑貝塚、同檜崎古墳、宇城市不知火町鴨籠古墳、下益城郡城南町の阿高貝塚・御領貝塚を調査し、27日に轟貝塚の調査を実施したとされている。その詳細については明らかではないが、29日に熊本市の明麗館でその調査成果が発表されたという（松本1967）。

（2）第5次調査

宇土市や県立宇土高等学校が主体となり、1958年7月30日から同8月3日にかけて発掘調査を実施した。詳細については付編1に再録しているので概要を記すにとどめたい。

調査は小林久雄氏、松本雅明氏、富樫卯三郎氏、原口長之氏、三島格氏、隈昭志氏らが参加し、宇土高校や熊本大学の学生らが協力した。

調査トレンチを設定した地点は、その多くが攪乱を受けており、プライマリーな状態であったのは I t の一部のほか、II b t の南半の混土貝層の下部以下、V b t の南半分の最下層、VI b t の黒土層以下であった。

このうち、最も原初の状態をとどめるとされた I t の一部の層位は5つの堆積層からなる。第1層は約20cmの耕土層で、第2層は約20～25cmの厚さで堆積する純貝層である。本貝層はカキが90%を占め、そのほかアカガイ、ハイガイ、ハマグリ、アサリなどが混じる。第3層は混土貝層で厚さ約15～23cmを測る。第4層は約10cmの貝層であり、大部分はハイガイで、それにカキ、アカガイ、ハマグリなどを含んでいる。この第4層直上で厚さ約15cm、広さ約1㎡の焼土層が検出された。第5層は表土下約70cmの貝片や礫を含まない純黒土層である。

上記の層から出土した遺物については、第2層では全て阿高式土器（縄文中期）であり、第3層以下では阿高式土器は出土していない。また、第3～5層まで轟式土器が出土しているが、このうち表裏に条痕をもつものと、そうでないものとは明らかに区別でき、前者は第5層最下層にのみ存在する。また、曾畑式土器に近いものは、条痕文土器よりも上層より出土し、第5層上層以上の直線文土器は曾畑式土器の影響であると推定している。

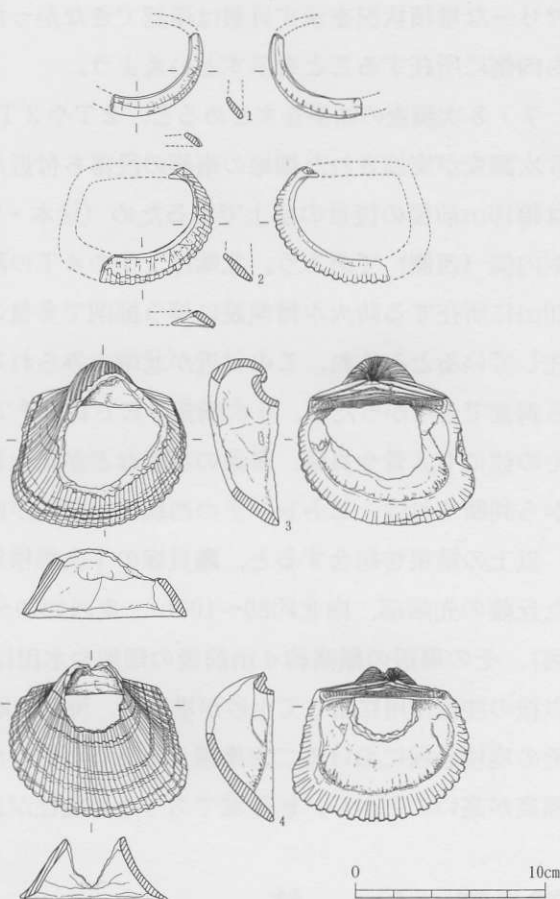
轟式土器の型式学的な検討の結果、A～D式に分類・細分し、確実な層位関係によって編年できるとした。条痕文のみをもつA式は、轟式土器のなかでも最下層から出土し、調査区を設定した台地の東南部から多く出土しており、西北部からはほとんど出土していない。

B式はミミズバレ状の隆起線文をもつ土器であり、C式は浅い条痕を残し、波状文を主体とするもの、D式は内面の条痕がほとんどなくなり、施文はハイガイのほかに半裁竹管やヘラに類するものを用い、A～C式とは別の要素を加えているものである。極めて様式化されており、底部にふくらみができ、口縁部が外に張ることを特徴とする。

松本氏はA・B式、C式の一部を伴出石器などより縄文早期と位置づけ、C式の多くやD式は縄文前期と想定した。また、轟式のなかに明らかに曾畑式土器の影響がみられるものが出土していることを指摘し、轟式から阿高式への移行の過程、阿高式の初期の様式はとらえられないとしながらも、口縁部の刻目、ヘラによる施文は阿高式への途をひらくものと指摘した。

(3) 第6次調査

本調査の契機は、先述したように熊日学術調査団が宇土、不知火地方の古代文化に関する学術調査の一環として、慶応大学講師（当時）だった江坂輝彌氏を主査とし、1966（昭和41）年3月20日から同29



第13図 第5次調査出土貝輪（1/4、中川2001）

日の期間で実施した。調査の詳細については次章以降を参照されたい。

第3節 平成期の調査

(1) 第7次調査

宇土市内遺跡範囲確認調査事業の一環として、平成16・17年度の2ヵ年にわたり第7・8次発掘調査を実施した。

両調査では貝塚の範囲を絞り込むことに主眼を置いた。その理由として、過去の調査成果から貝塚中心部については、ある程度の様相はつかめていたものの、貝塚の範囲については地表面観察のみにたよらざるを得なかったことによる。

7次調査では、貝塚中心部から北、東、南へ約50～70m離れた畑地に、それぞれ幅約1.5～2m、長さ約4mのトレンチを3つの地点に設定した(1T～3T)。調査の結果、1Tと2Tで混貝土層を確認し、各トレンチから縄文土器や石器、弥生土器、古墳時代の土師器や須恵器、中世の土師質土器や瓦質土器、白磁、木器などが出土した(第7図)。

(2) 第8次調査

本調査では、貝塚北側で破碎状態の貝類の散布がごくわずかに認められる地点を幅2m、長さ4mのトレンチ(4T)を設定して調査を行った。その結果、地表下約2mで混貝土層を検出し、縄文土器や弥生土器、土師器、石器が出土した(第7図)。7・8次調査においては純貝層が検出されず、プライマリーな堆積状況を示す貝層は確認できなかったが、これは貝塚の1次堆積層(貝層)が調査地点よりも内側に所在することを示すといえよう。

7・8次調査の結果をまとめると、2Tや3Tの調査結果や地形より、貝塚の中心部分の1・2・5・6次調査が実施された畑地の南側の段落ち付近が1次堆積層の南端とみられる。また、本畑地の東縁部は幅10m前後の後世の盛土であるため(松本・富樫1961)、1次堆積層の東端は現在の段落ちよりもやや内側(西側)であろう。北端は1Tや4Tの混貝土層が二次堆積と認定し得ること、1Tより南へ約20mに所在する防火水槽埋設に伴う掘削で多量の貝類が出土していることから、この付近にも貝層が存在しているとみられ、この付近が北端とみられる。最後に西端については、住居が密集していることから調査できなかったが、6次調査のEトレンチで、縄文時代後期の北久根山式土器がまとまって出土し、その他にも人骨や貝輪、多数の石器などが出土した純貝層が存在することから、地形と貝類の散布状況から判断すれば、Eトレンチの西側20m前後が西端と推定される。

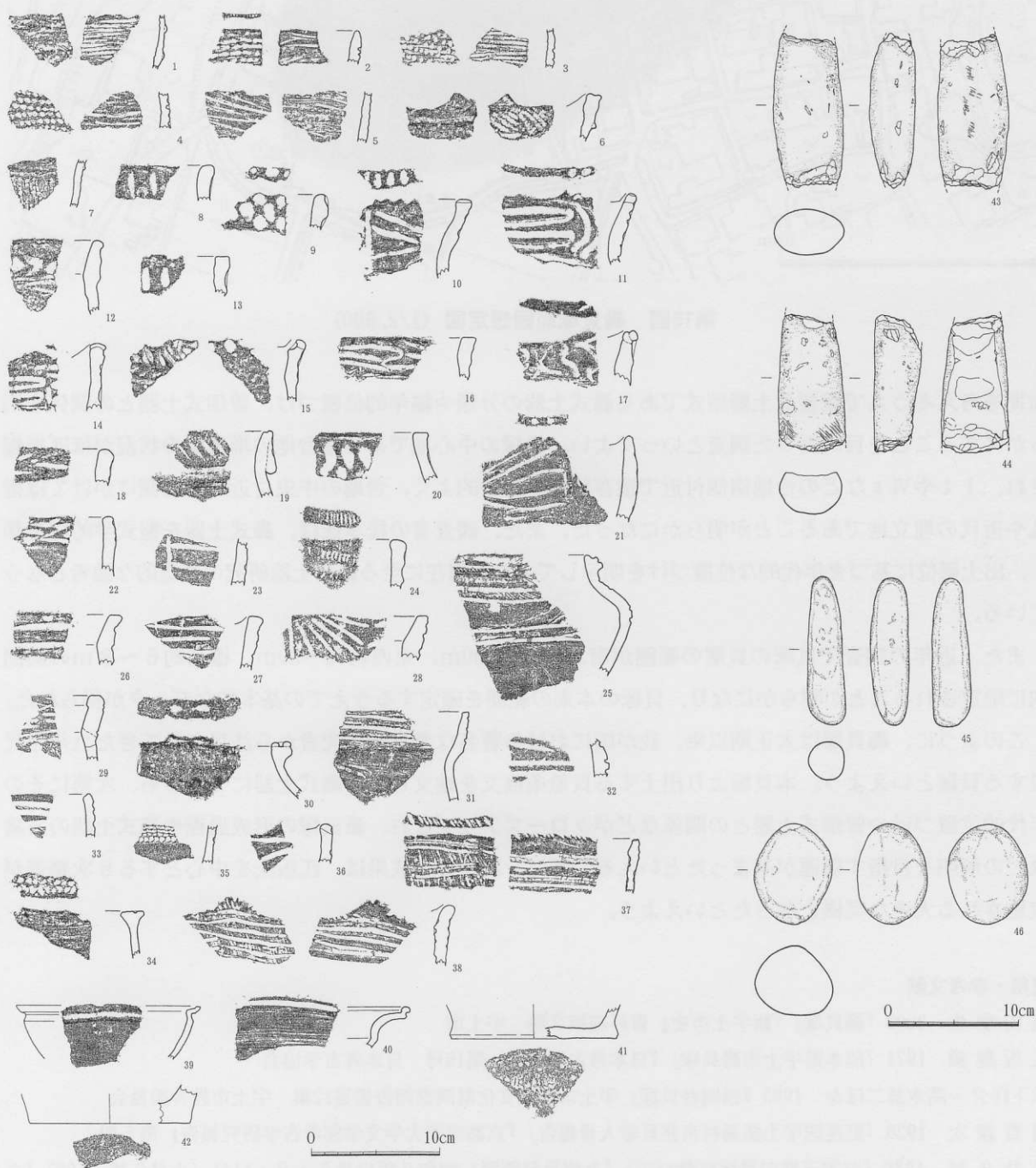
以上の結果を総合すると、轟貝塚の1次堆積層の範囲は貝塚の西側から東側に向かって舌状に派生した丘陵の先端部、南北約80～100m、東西約70～80m、標高約6～8mの範囲内に限定されよう(第15図)。その周辺の標高約4m前後の畑地や水田は、縄文時代当時、現在より標高が数m低く、縄文時代以後の沖積作用によって土砂が堆積し、現在の地形を形成したとみられる。調査で検出した混貝土層は、その堆積過程における二次堆積土である可能性が高い。なお、貝殻が散布している貝塚西側の住宅地は標高が高いことから、居住域であった可能性がある。

第4節 小 結

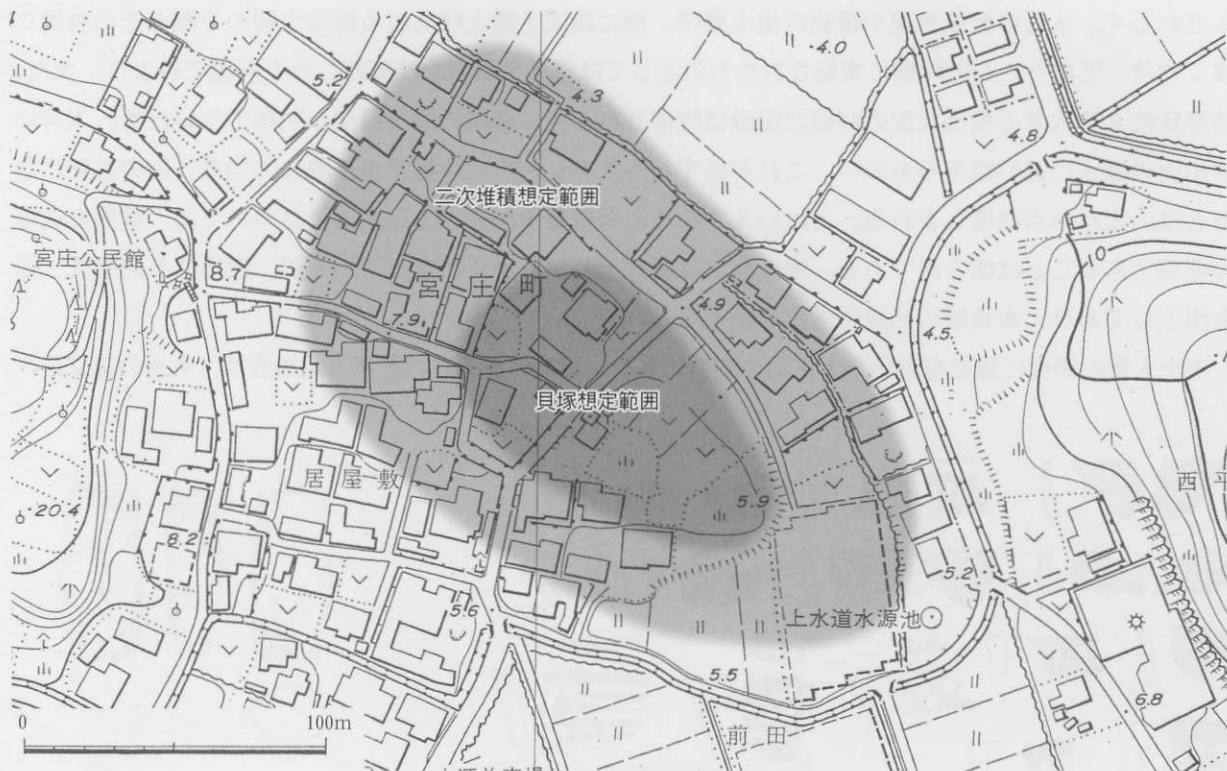
大正期の調査のうち、第2次調査に関しては日本近代考古学の父といわれる濱田氏が携わった調査に

ふさわしく、人骨の配置状況や遺物の出土層位、後に轟式土器と呼ばれる縄文土器の分類とその特徴にまで言及しており、この時期に実施されたものとしては極めて緻密な調査だったと評価できよう。また、清野氏による人骨の検出状況の詳細な記録は特筆されるが、墓壇の検出層位が明確でないため、人骨の検出面の深さに違いはあるものの、これが必ずしもストレートに時期差を反映していることの証明になるとはいえない点は惜まれる。とはいえ少なくとも貝層中から出土した人骨については、貝層形成後の埋葬であることは明らかである。本調査では轟式土器が数多く出土しているが、後出する阿高式土器も出土しており、本貝層の形成時期が問題となろう。

出土人骨の研究に重きをおいた大正期の調査に対し、戦後に実施された第5次調査は、九州の縄文早・



第14図 第7・8次調査出土遺物 (1/5、藤本2006)



第15図 轟貝塚範囲想定図 (1/2, 500)

前期を考えるうえで重要な土器型式である轟式土器の分類や編年の位置づけ、曾畑式土器との関係を明らかにすることを目的とした調査といってよい。貝塚の中心地である低台地の堆積層の状況がほぼ把握され、I t やVI t などの台地南側付近で遺存状態が比較的良好、台地の中央付近から北側にかけては境乱や近代の埋立地であることが明らかになった。また、調査者の松本氏は、轟式土器を型式学的に分類し、出土層位に基づき年代的な位置づけを明示しており、現在に至る轟式土器研究の基礎的な論考となっている。

また、近年の調査で貝塚の貝層の範囲が南北約80～100m、東西約70～80m、標高約6～8mの範囲内に限定されることが明らかになり、貝塚の本来の範囲を確定するうえでの基本的なデータが得られた。

このように、轟貝塚は大正期以来、我が国における著名な考古学研究者から注目されてきた九州を代表する貝塚といえよう。本貝塚より出土する貝殻条痕文を地文とする轟式土器についても、次第にその年代的な位置づけや曾畑式土器との関係などがクローズアップされ、轟貝塚の形成過程や轟式土器の系譜などの解明を目指す機運が高まったといえる。特に5次調査の成果は、江坂氏を中心とする6次調査が実施される大きな契機となったといえよう。

引用・参考文献

- 池田 朋生 2002 「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
 江坂 輝彌 1971 「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号 日本考古学協会
 木下洋介・高木恭二ほか 1985 『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集 宇土市教育委員会
 清野 謙次 1920 「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊
 小林 久雄 1930 「益宇三郡の貝塚に就いて」『九州日日新聞』昭和5年12月7・9・11日（小林久雄 1967 『九州縄文土器の研究』に再録）

- 小林久雄 1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第1巻第2号 東京考古学会
- 鈴木文太郎 1917「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊
- 鈴木文太郎 1918「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第3号
- 中川毅人 2001「轟貝塚出土の動物遺存体および貝製品」『考古学研究室報告』第36集 熊本大学文学部考古学研究室
- 濱田耕作・榊原政職 1920「肥後国宇土郡轟村宮莊貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊
- 藤本貴仁 2005『轟貝塚・馬門石石切場跡』一字土市内遺跡範囲確認調査概報―一字土市埋蔵文化財調査報告書第27集 宇土市教育委員会
- 藤本貴仁 2006「轟貝塚」『轟貝塚 馬門石石切場跡』一字土市内遺跡範囲確認調査報告書―一字土市埋蔵文化財調査報告書第28集 宇土市教育委員会
- 古森政次・金田一精 2003「縄文時代」『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市
- 松本雅明・富樫卯三郎 1961「轟式土器の編年―熊本県宇土市轟貝塚調査報告―」『考古学雑誌』第47巻第3号 日本考古学会
- 松本雅明 1967「肥後考古学会の成立前後」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会
- 三森定男 1935「肥後轟貝塚の土器について―覚書―」『考古学』第6巻第2・5号
- 宮本一夫 1990「轟B式土器の再検討―京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に―」『肥後考古』第7号 肥後考古学会

第4章 第6次調査の概要

第1節 調査の方法

京都大学や宇土高校・熊本大学などが調査を行った轟貝塚の中心地にあたる丘陵端部の緩傾斜地（標高約5～7m）で発掘調査を実施した。調査地点は宇土市宮庄町字須崎129、130、131、132-1、176-1である。

北西－南東方向にAトレンチ、北東－南西方向にBトレンチとCトレンチを配し、Aトレンチ南側に接してDトレンチ、さらに北西側の道路を隔てて北西－南東方向にEトレンチを設定した（第16図）。各トレンチの幅は約2mで、2m四方のグリッド（以下、適宜Grと表記する）を設定し、グリッドごとに調査担当者及び作業員を配置した。当該トレンチは上述した過去の調査トレンチをできる限り避けるように設定したが、一部に重複した地点もある。次に各トレンチの配置状況及び調査面積について記すことにしたい。

最も面積が広いAトレンチは第1～30のグリッドを配する。このうち調査を行ったのは1～24Grであり、Aトレンチ14GrでBトレンチ6Gr、Aトレンチ21GrでCトレンチ4Grと重複している。本トレンチの調査面積は重複部分を含んで約89㎡である。Bトレンチでは1～15Grを設定したが、実際に調査を行ったのは1～9・14・15Grである。また、Cトレンチも1～15Grであるが、Bトレンチと同様に未掘部分があり、1～6・13～15Grで調査を実施した。調査面積はAトレンチとの重複部分を除いてBトレンチで約27㎡、Cトレンチでは40㎡である。Dトレンチでは1～24Grを設定。実際に調査したのは1・5・9・13・17～20・22～24Grで、その他のグリッドは未調査である。調査面積は約44㎡。また、Eトレンチは1～3Grと他のトレンチとくらべて小規模で、3Grの一部を拡張した。調査面積は約13㎡である。A～Eトレンチをあわせた調査面積は約213㎡である。

調査では、まず調査地周辺を50cmコンターで測量を行い、調査トレンチを設定、表土除去を実施した。その後、グリッド単位で層序の把握に努めながら基盤層に到達するまで堆積土を掘り進めた。ただし、一部に調査期間の関係から基盤層まで到達しなかった地点もある。

第2節 調査区における土層堆積について

（1）土層堆積の概要

A～Dトレンチを設定した緩傾斜地における基本層序は第17図の左図である。調査の結果、プライマリーな層序と判断できるDトレンチ及びAトレンチ南半部付近の土層堆積をもとにしている。

Aトレンチ北半部やBトレンチ及びCトレンチ北側については、大部分で中世以降の改変を受けており、良好な堆積状況ではなかった。また、A～Dトレンチと道路を挟んで対峙するEトレンチについては、調査の結果、土層の堆積状況及び主体となる出土遺物の時期が異なるため、前者とは区別した。以下では、A～DトレンチとEトレンチに分け、調査の結果から得られた基本的な層位についてまとめている。

（2）A～Dトレンチの基本層位

本地点においては設定した調査トレンチの範囲が広いと、層序が比較的細かく分けられる地点もある。



第16図 調査トレンチ及びグリッド配置図 (1/600、トレンチ内の網掛けは調査実施グリッド)

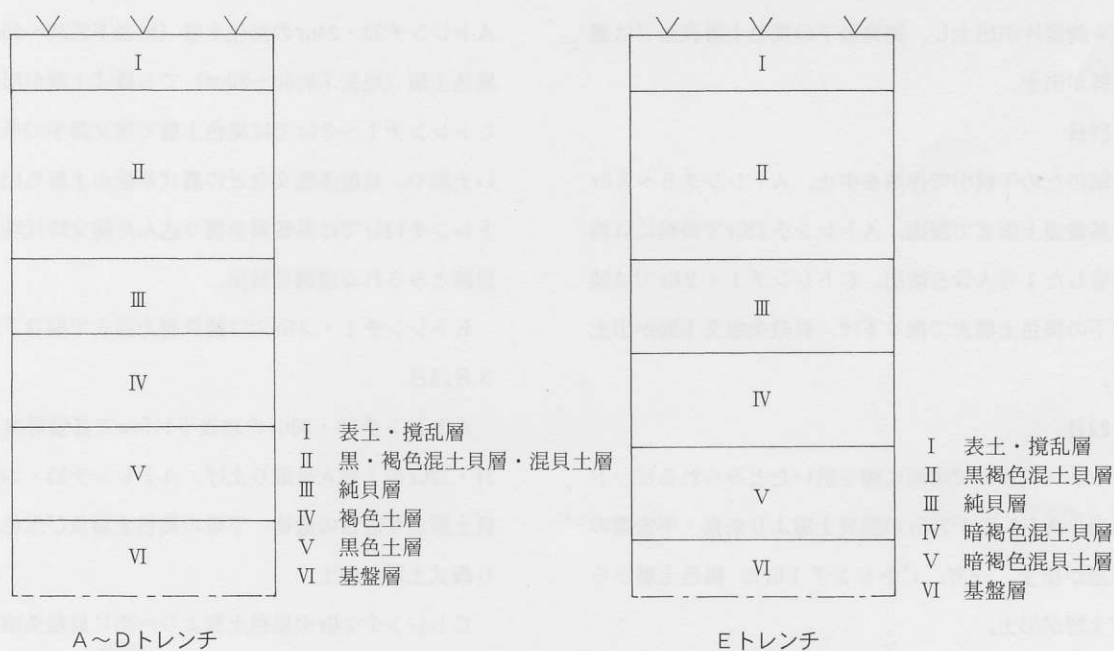
るが、基本的には同じような土層の形成状況を把握できた（第18～20図）。また、Aトレンチ北半部では後世の改変が著しく、プライマリーな堆積状況を確認することはできなかったが、土墳墓が検出されたAトレンチ南側やDトレンチの一部では良好な堆積状況を把握できる。これらの土層堆積状況を総合すると、基本的な層序はおおむねⅠ～Ⅵ層に大別される（第17図の左図）。

Ⅰ層は厚さ10～20cm程度の表土層（耕作土）及び攪乱層である。Ⅱ層は黒色や褐色の混土貝層及び混貝土層で、中世に大幅な改変を受けており、弥生～中世の遺物を包含する。厚さはおおむね20～50cmで、一部には100cm以上の地点もある。Ⅲ層は厚さ約20～40cmのカキやハマグリなどの純貝層で、阿高式土器を主体とする縄文時代中期の土器が出土しており、当該期に形成された貝層とみられる。江坂氏による調査概報（江坂1971）では、「マガキの多い中期の阿高式土器の時期の純貝層があり、その下の一部に轟式後半の時期のハイガイの多い薄い貝層が認められ」と記述しているが、その範囲や出土遺物の詳細は不明である。Ⅳ層は褐色土層で、約20～30cmの厚さで堆積しており、縄文時代前期の轟式土器が数多く出土している。Ⅴ層は厚さ20～30cm程度の黒色土層で、Ⅳ層と同様に押型文土器や塞ノ神式土器、轟式土器など早期～前期の土器のみが出土している。Ⅵ層は基盤層のローム層である。

（3）Eトレンチの基本層位

本トレンチにおける基本的な層序はⅠ～Ⅵ層に分けることができる（第17図の右図、第20図）。

Ⅰ層は表土層（耕作土）及び攪乱層で、厚さは約10～15cmである。Ⅱ層はハマグリやハイガイなどを包含する混土貝層で、土色は黒褐色を呈し、厚さは約20～65cmである。上下2層に細分でき、上層のⅡa層は貝が少ないのに対し、下層のⅡb層は貝が多く含まれており、Ⅱb層で縄文後期前半とみられる埋葬人骨が3体検出されている。Ⅲ層は縄文後期に形成されたとみられるマテガイやアゲマキなどを含む純貝層で、約5～30cmの厚さで堆積しており、部分的に混貝土層を挟む。Ⅳ層は厚さ約5～30cmを測る暗褐色の混土貝層で、炭化物を多く含んでおり、鐘崎式土器や北久根山式土器、市来式土器など縄文後



第17図 A～Dトレンチ及びEトレンチの基本層序

期中頃を中心とする遺物が出土している。V層はやや赤みを帯びた暗褐色の混貝土層で、厚さは約20～50cmを測り、IV層と同様に縄文後期の遺物を包含する。VI層は基盤層とみられる黄ばみを帯びた赤褐色粘土層であり、上面は凹凸が著しく、本地点周辺において長期間にわたり人為的改変が加えられていたことが推測される。

第3節 調査日誌抄

1966年3月18日

貝塚周辺の平板測量を実施。Aトレンチを設定。

3月19日

A～Cトレンチの表土除去作業開始。

3月20日

Aトレンチでは、ほぼ全域にわたり表土下から攪乱層や混土貝層を検出し、中世の土師質土器や中国製青磁が出土。Bトレンチ5Grでは攪乱層を検出し、近世遺物が混入。Cトレンチ1～3Grでも表土下で混土貝層を検出し、土師器や須恵器が出土。

3月21日

Aトレンチ1～3Grの混土貝層で、底部糸切り離しの土師質土器や陶器、Aトレンチ16Grでは地表下約70cmの深さで中国製の青磁が出土。Bトレンチ5Grでも表土下約50cmで近世の遺物が出土。

これに対し、Cトレンチ1Grでは阿高式土器を包含する純貝層（マガキが多い）を検出。直上の混土貝層では埴輪や陶器片が出土し、純貝層下の褐色土層表面では轟式土器が出土。

3月22日

降雨のため午前中で作業を中止。Aトレンチ5～8Grでは基盤層上面まで検出。Aトレンチ22Grで両腕に貝輪を装着した1号人骨を検出。Cトレンチ1・2Grでは純貝層下の褐色土層まで掘り下げ、貝殻条痕文土器が出土した。

3月23日

Aトレンチ6Grで床面に礫を敷いたとみられるピットを検出。Aトレンチ20Grの混貝土層より奈良・平安期の須恵器が出土。一方、Cトレンチ1Grの褐色土層から轟式土器が出土。

3月24日

Aトレンチ8Grで基盤層を掘り込んだ直径50cm程のピッ

トを完掘した。また、Aトレンチ10・11Gr混土貝層からは底部糸切り離しの中世の土師質土器が多量に出土。一方、層序と出土遺物からAトレンチ19・20Gr南半分は一部をのぞきプライマリーな層と推定される。Aトレンチ20Grの褐色土層は攪乱されておらず、Cトレンチ3Grの褐色土層と連なることが明らかとなる。Aトレンチ23・24Grでは褐色土層を轟式層と明記。

Cトレンチ1Grの褐色土層掘り下げ。表裏とも貝殻条痕を施す土器が増加する。Cトレンチ2Gr褐色土層より轟式土器や石鏃、石匙、その下層の黒色土層からは縄文土器の底部が出土。褐色土層は遺物の出土状況から攪乱がみられず、轟式土器を包含する層であることが明確となる。Cトレンチ3Grの褐色土層から石鏃、削器が出土。これに対し、Cトレンチ13～15Grでは地表下約80cmの基盤層まで陶磁器が出土しており、地表から比較的深い位置にも攪乱がおよんでいることが判明。

3月25日

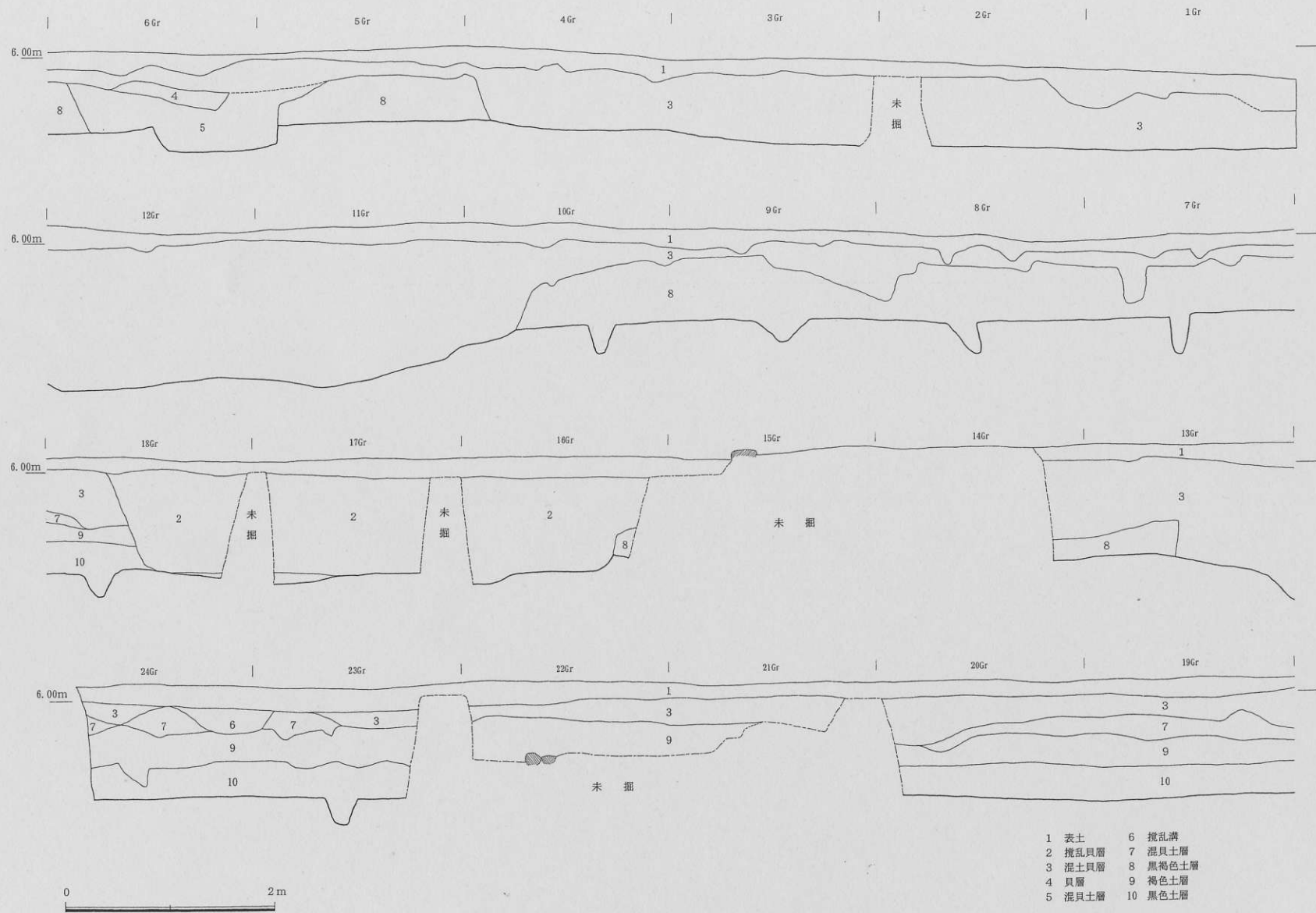
Aトレンチ21・22Gr褐色土層で轟式土器が出土。また、Aトレンチ23・24Grの褐色土層（地表下約30～60cm）と黒色土層（地表下約60～80cm）でも轟式土器が出土。Cトレンチ1～3Grでは黒色土層で無文薄手の条痕の無い土器や、貝殻条痕文などの轟式系統の土器も出土。Cトレンチ14Grでは基盤層を掘り込んだ縄文時代晩期の住居跡とみられる遺構を検出。

Eトレンチ1・2Grでは純貝層上面まで掘り下げ。

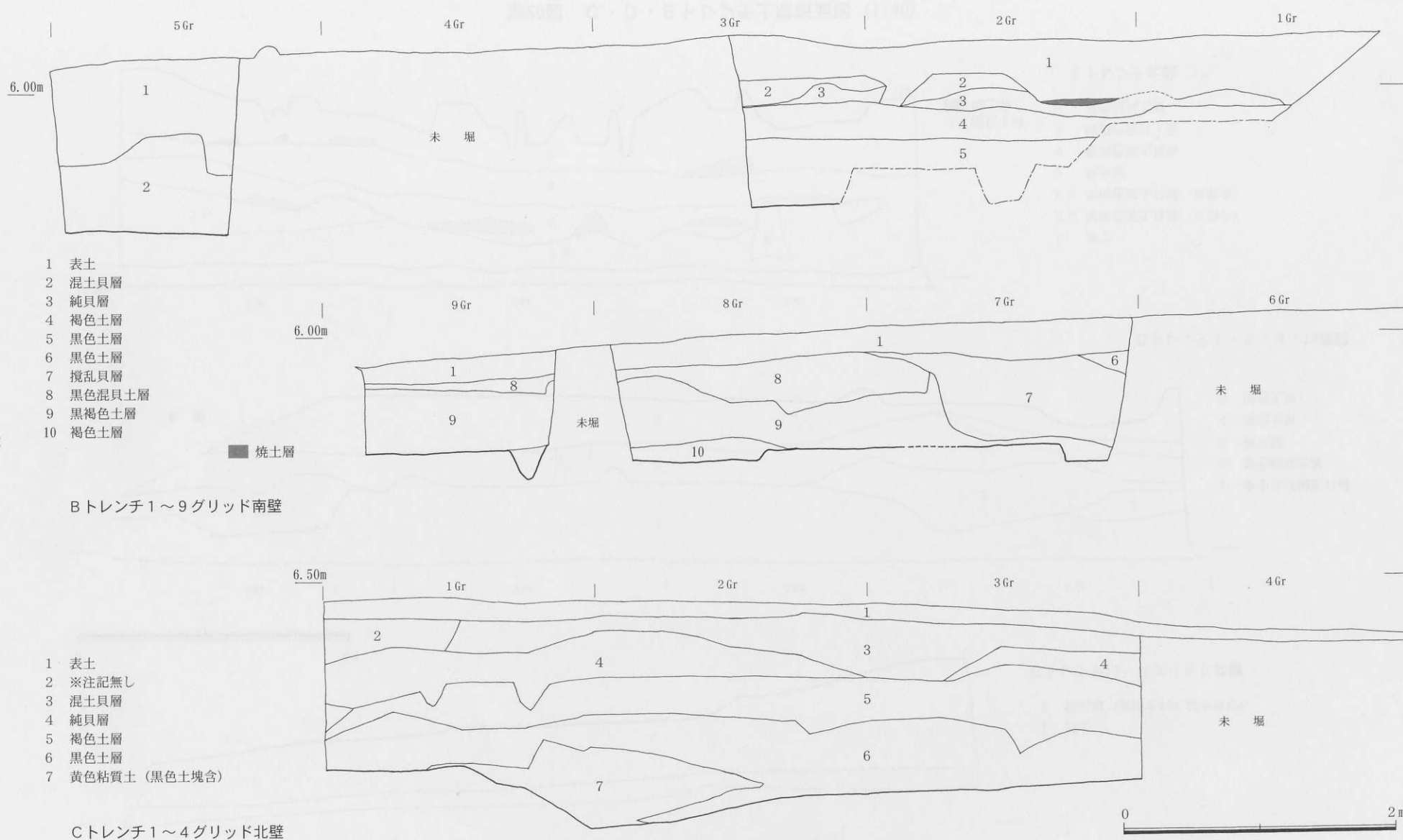
3月26日

Aトレンチ19・20Grの地表下115cmで基盤層検出。同21・22Grの1号人骨取り上げ。Aトレンチ23・24Grの混貝土層より近世の遺物、下層の褐色土層及び黒色土層より轟式土器が出土。

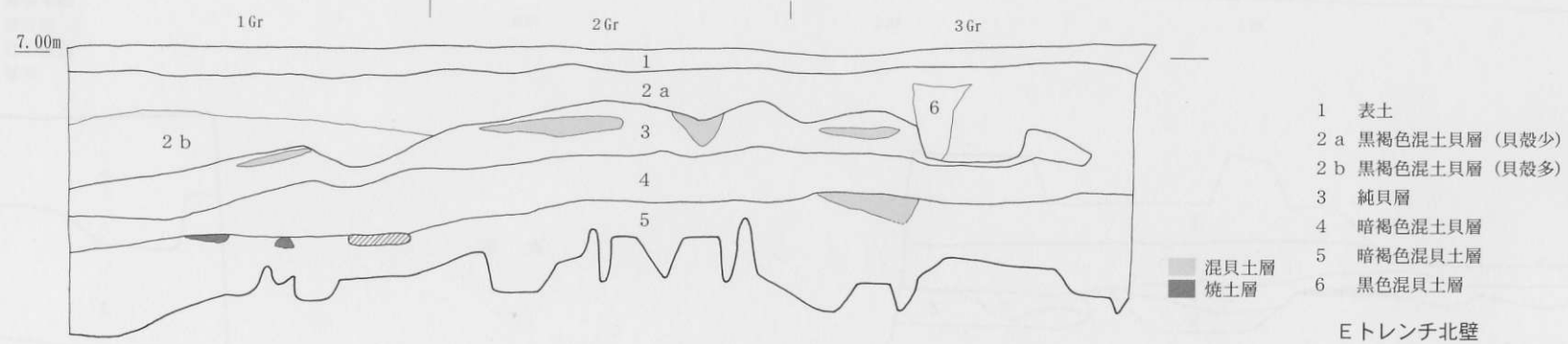
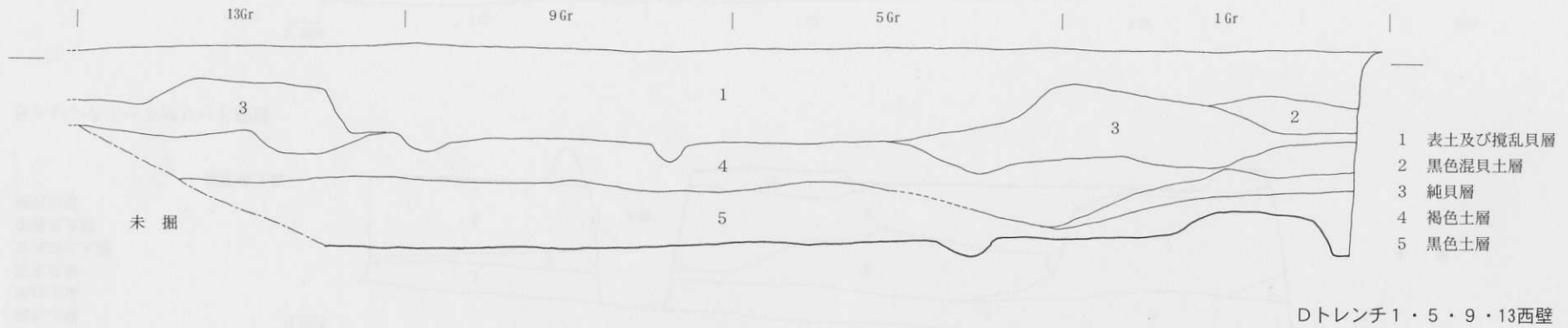
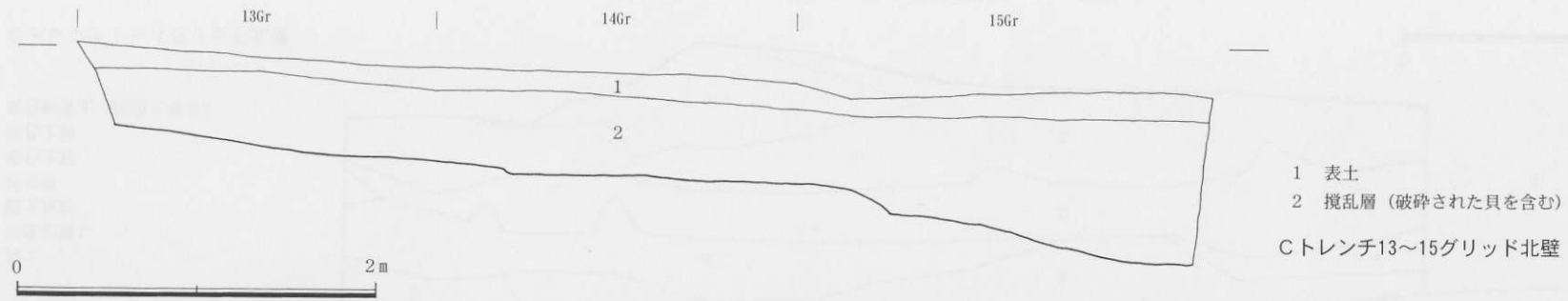
Cトレンチ2Grの黒色土層より内面に貝殻条痕がない土器が出土。同15a・15bGrでは、混貝土層と基盤層の間に縄文晩期のプライマリーな層を確認したが、住居跡



第18図 Aトレンチ西壁土層断面図 (1/40)



第19図 B・Cトレンチ土層断面図 (1/40)



第20図 C・D・Eトレンチ土層断面図 (1/40)

壁面は未検出。

Dトレンチ5Grで釘やブリキ状片が出土しており、地表下50cmまでは攪乱か。Dトレンチ18Grの純貝層（マガキ主体）で阿高式土器が出土。

Eトレンチ1Grの純貝層は市来式土器や北久根山式土器が主体をなす。Eトレンチ3Grの黒褐色混土貝層中（地表下約35cm）で中世の底部糸切り離しの土師質土器を伴う4号人骨を検出。

3月27日

Aトレンチ21Grの混土貝層と褐色土層の境より2号土壙墓（2号人骨）、Bトレンチ7Grの褐色土層より7号土壙墓（7号人骨）検出。Dトレンチ19Grの褐色土層上面で炉跡？検出し、同22Grの褐色土層より轟式土器が出土。

Eトレンチ2Grの暗褐色混土貝層、暗褐色混土層より縄文後期の土器が出土。Eトレンチ3Grでは4～6号土壙墓（4号～6号人骨）検出。

3月28日

Dトレンチ9Grの褐色土層で貝殻条痕文土器、直下の黒色土層でも同様の土器が出土。また、同13Grの褐色土層や黒色土層で轟B・C式土器、同18Grの褐色土層より押型文土器や轟式土器、同22Grの褐色土層下部や黒色土層で轟式土器が出土。

Eトレンチ1・2Grは基盤層まで完掘。Eトレンチ3Grでは縄文後期の5号人骨、縄文後期の8号人骨を検出。

3月29日

Dトレンチ1Grで縄文時代の炉跡？検出（径約70cm、地表下約50cm）。また、純貝層内よりイノシシ骨、褐色土層より轟式土器が出土。

第5章 遺 構

第1節 縄文時代の遺構

(1) 土壙墓

Aトレンチ2体、Bトレンチ2体、Eトレンチ3体の計7体の縄文時代の埋葬人骨が検出された。土壙墓のプランや埋葬状態など詳細がはっきりしないものもあるが、日誌の記述や人骨の略測図から判断して、土壙墓出土の人骨とみられる。

1号土壙墓（1号人骨） Aトレンチ21・22Gr褐色土層中で検出。主軸を南東－北西方向にとる楕円形の土壙墓である（付編1－3小片論文及び図版5参照）。頭部を東に向けた仰臥屈葬で、遺存状態は良好である。両腕に貝輪を装着しており、左腕がアカガイ製、右腕がベンケイガイ製である。また、直腸・結腸・大腸付近より黄褐色を呈する食物残渣（糞石）が検出された。観察の結果、30匹近いマイワシ・カタクチイワシ・ハゼなどの骨が含まれていた。

2号土壙墓（2号人骨） Aトレンチ21Gr混土貝層と褐色土層の間で検出された。土壙墓の形状は楕円形で、頭部をほぼ西に向けた仰臥屈葬の熟年女性人骨が埋葬されていた（図版6上段）。頸骨周辺でイモガイやアマオブネなどの巻貝製の玉が出土しており、おそらく首飾りであろう。

3号土壙墓（3号人骨） Bトレンチ3Grで仰臥屈葬とみられる性別不明の老年人骨が検出された。頭位を北に向ける。土壙墓の形状は不明である。

5号土壙墓（5号人骨） Eトレンチ3Grで検出された。中世の土壙墓（4号土壙墓、後述）の下部に位置し、年齢は10代前半とみられるが性別は不明である。埋葬方位は北西－南東方向で、頭部は北西側である。

6号土壙墓（6号人骨） 5号土壙墓と同じく4号土壙墓の下部で検出されたらしいが、詳細については不明である。

7号土壙墓（7号人骨） Bトレンチ7Gr黒褐色土層で検出された楕円形を呈する土壙墓である。主軸は北－南方向で、頭部は北側にある。埋葬体位は横臥屈葬で、頭部を西側に向けている。

8号土壙墓（8号人骨） Eトレンチ3Grの5号人骨直下において、頭部を北西に向けて左側を下にした横臥屈葬の老年女性とみられる人骨を検出した。埋土より出土した土器より縄文時代後期のものとみられる。

(2) 住居跡

Cトレンチ15Grの攪乱層下部において、竪穴住居跡とみられる遺構を検出した。方形プランと推定されているが、攪乱によりごく一部を確認したにすぎない。床面から御領式土器の深鉢や浅鉢が出土したと日誌に記載されていることから、縄文時代後期末頃のものであろう。

(3) 配石遺構

Bトレンチ2Gr褐色土層中で検出された配石遺構である（図版3下段）。南北約1.3m、東西約1.1mの範囲に拳大から直径30cm前後の塊石が20点出土した。石材の種類や加工の有無については不明である。

第2節 中世の遺構

(1) 土壙墓

Eトレンチ3Gr黒褐色混土貝層で検出された4号土壙墓である(図版7下段)。主軸を北西-南東方向にとり、頭部は北西側である。検出規模は長径1.2m、短径0.95m。埋葬体位は伏臥屈葬で、頭部を西に向けており、熟年女性とみられる。胸部と左肘近くに土師質土器の皿が4個副葬されている。

(2) 横堀跡

Aトレンチ10~13Grで検出された中世の横堀跡である。検出規模は土層断面図より判断すれば、幅約4.8m、底幅約3.9m、深さ約1.2mで、中世居館の周囲に配置されたものであろう。日誌や実測図など詳細な記録がないため、時期について言及することは難しいが、埋土より出土した中国製青磁などから中世後半の造作と推定される。